

審査意見への対応を記載した書類（6月）（本文）

（目次）国際教養研究科 国際教養学専攻（M）

【設置の趣旨・目的等】

1. 養成する人材像、3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーをいう。以下同じ。）の妥当性及び整合性について、以下の点を明確にするとともに必要に応じて適切に改めること。

- (1) 養成する人材像について、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」の「5. 育成する人材像とディプロマ・ポリシー」において「国際言語学コース」では、「高度な国際言語力マインドに裏打ちされた質の高い、総合的判断力に優れた人材」を養成することを掲げているが、「高度な国際言語力マインド」とはどのようなもので、それに「裏打ちされた質の高い、総合判断力」とはどのような能力を有する人材なのかについて、具体的な記載がなく、養成する人材像及びディプロマ・ポリシーの妥当性、整合性が判断できない。養成する人材像を整理の上、ディプロマ・ポリシーとの整合性について改めて具体的に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

（是正事項）・・・・・・・・・・4

1. 養成する人材像、3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーをいう。以下同じ。）の妥当性及び整合性について、以下の点を明確にするとともに必要に応じて適切に改めること。

- (2) カリキュラム・ポリシーについて、「設置の趣旨等を記載した資料（本文）」には、構成や科目区分の考え方等の説明はあるが、ディプロマ・ポリシーのどの項目がカリキュラム・ポリシーのどの項目に対応するかが判然とせず、具体的な説明もなされていない。また、「資料2. 3つのポリシーの関係図」においても3つのポリシーの各項目の対応関係が示されていないため、ディプロマ・ポリシーの各項目とカリキュラム・ポリシーの各項目の対応関係を説明した上で、3つのポリシーの整合性についても明確になるよう、資料も含め適切に改めること。

（是正事項）・・・・・・・・・・8

2. カリキュラム・ポリシーに学修成果の評価の在り方等に関する具体的な記述が見受けられないことから、適切に改めること。

（改善事項）・・・・・・・・・・18

【名称等】

3. 「国際言語学コース」では、コース名及び学位名称に「国際言語学」を用いているが、言語学を学修する授業科目は「言語学演習」と「応用言語学演習」のみとなっていることから当該授業科目のみで十分な内容なのか判然とせず、また両科目では英語以外の言語は扱わないように見受けられるため、「国際言語学」という名称との整合性に疑義がある。さらに、両科目とも選択科目であるため、学生の判断により両科目を選択しなかった場合、「言語学」を学修していないにも関わらず、「言語学」を冠する学位を授与することとなるため、教育課程の妥当性に疑義がある。したがって、教育内容に合致したコース名及び学位名称になっているか明確に説明しつつ、必要に応じて改めること。

(是正事項) 20

4. 「国際文化学コース」では、コース名及び学位名称に「国際文化学」を用いていることについて、養成する人材像では、「国際的な問題に真剣に取り組む人材」を掲げ、授業科目でも「国際食糧問題」や「国際経済学」など国際的な社会問題を学修する教育課程となっているが、国際文化に関する授業科目は単独の授業科目として設定されておらず、授業内で数回実施されている程度であるように見受けられる。よって、教育課程が名称に一致しているか明確でなく、誤解を招く可能性があるため、教育内容に合致したコース名及び学位名称になっているか明確に説明しつつ、必要に応じて改めること。

(是正事項) 25

【教育課程等】

5. ディプロマ・ポリシー (ア) の「高度な国際言語力 (特に英語力あるいは中国語力)」とあるが、中国語力を身に付ける授業科目は、選択科目の「中国語特論」だけであるため、掲げるディプロマ・ポリシーに照らして教育課程が適切に編成されているか不明確である。このため教育課程の妥当性について明確に説明するか、必要に応じて適切に改めること。

(是正事項) 29

6. 選択必修科目として「国際文化学基礎演習」及び「国際言語学基礎演習」という授業科目が設定されているように見えるが、実際は両授業科目の中に更に幾つかの授業科

目が設定され、そのうち「3科目以上（6単位以上）」を履修することになっており、どの科目を選択するかは学生の判断によるため、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づいた教育課程が適切に編成されているか不明確である。このため、教育課程の妥当性を説明するか、必要に応じて適切に改めること。

(是正事項) 33

7. 「情報処理学特論」、「環境・生命科学特論」、「社会心理学特論」、「日本教育史特論」の4つの授業科目のシラバスについて、「学生に対する評価」では、「出席」を学生に対する評価として設定しているが、授業への出席そのものを評価するという不適切な評価内容のようにも見受けられることから、適切な記載に改めること。

(改善事項) 46

【教員組織】

8. 専任教員の年齢構成が高齢に偏っていることから、教育研究の継続性の観点から、若手教員の採用計画など、教員組織の将来構成を明確にすること。

(改善事項) 48

(是正事項) 国際教養研究科 国際教養学専攻 (M)

1 養成する人材像、3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーをいう。以下同じ。）の妥当性及び整合性について、以下の点を明確にするとともに必要に応じて適切に改めること。

(1) 養成する人材像について、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」の「5. 育成する人材像とディプロマ・ポリシー」において「国際言語学コース」では、「高度な国際言語力マインドに裏打ちされた質の高い、総合的判断力に優れた人材」を養成することを掲げているが、「高度な国際言語力マインド」とはどのようなもので、それに「裏打ちされた質の高い、総合判断力」とはどのような能力を有する人材なのかについて、具体的な記載がなく、養成する人材像及びディプロマ・ポリシーの妥当性、整合性が判断できない。養成する人材像を整理の上、ディプロマ・ポリシーとの整合性について改めて具体的に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

(対応)

(1) この是正事項に関連するものとして、是正事項3に指摘されました「国際言語学コース」名称について、「国際コミュニケーションコース」と変更させていただきましたことを前提として、是正事項1(1)に対応させていただきます。まず「国際コミュニケーションコース」とした理由は、地方の企業の海外進出が年々増加しており、地方においても海外との交渉ができる人材の需要が増えている昨今の現状にあります。例えば東京に位置する他大学には、そのような人材を輩出する目的のための「国際コミュニケーション専攻」を掲げる修士課程があり、本学が掲げた「国際言語学コース」(旧名称)の趣旨・目的と非常に類似しています。「国際言語学コース」では、指導教員の個別指導を受けながら英語力を向上させ、国際的な交渉力を高めたいという狙いがありました。国際的な視野を持ち、世界の人々と対等に渉外を担うことができるコミュニケーションスキルの修得を目指すため、「国際コミュニケーションコース」と名称を変更した次第でございます。その上で、当初から目的としている育成人材像をディプロマ・ポリシーとして整理・修正いたしました。また、ご指摘にございました「高度な国際言語力マインド」及び「裏打ちされた質の高い、総合判断力」という表現はあいまいな表現のため、改めまして具体的な表現にいたしました。

ところで、国際的な交渉などにおいてコミュニケーションが取れるほどの英語力の育成が見込めない学生や社会人の入学者に対しては、国際社会研究コース(旧名称:国際文化学コース)を考えました。これにつきましては是正事項3で対応いたします。

なお、修正に関しまして、先の申請時に記載した設置の趣旨や設置目的、教育課程の編成ほか、多くの重要な個所について基本的な内容は変わっていません。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (7 ページ)

新	旧
<p>5. 育成する人材像とディプロマ・ポリシー 今回申請する大学院修士課程には2つのコース、<u>国際コミュニケーションコースと国際社会研究コース</u>を設ける予定である。両コースともに、教育上の共通点が多いが、前者は<u>国際的なコミュニケーション力の向上に、後者は多様化する世界の異文化や国際的課題</u>の理解向上に向けて、より傾注した学問を涵養するコースである。<u>これら大学院修士課程の育成する人材像は、宮崎国際大学の学則第1条にある「本学は、教育基本法及び学校教育法の定めるところに従い、建学の精神「礼節・勤労」に基づき人格の陶冶に務め、国際的視野に立った教養と専門的知識・技術を修得し、文化の発展と人類の福祉に寄与する人材を育成することを目的とする。」に則っている。そのため、上記の学則の目的と、地域社会が要望する「政治・経済・産業・教育他、あらゆる分野で交渉能力や表現能力を有する人材の輩出」に則したいいくつかの科目を設定し、より高度な教育を目指すものである。</u></p> <p><u>本修士課程では、修了までに下記に示す姿勢や能力を学生が身に付けることを求めている。各コースにおいて所定の期間在学し、教育目的に沿って設定した授業科目を履修し、所定の単位数を修得して、かつ必</u></p>	<p>5. 育成する人材像とディプロマ・ポリシー 今回申請する大学院修士課程には2つのコース（<u>国際言語学コースと国際社会研究コース</u>）を設ける予定である。両コースともに、教育上の共通点が多いが、前者は国際言語力の向上に、後者は<u>多国の異文化の理解</u>向上に向けて、より傾注した学問を涵養するコースである。</p>

要な研究指導を受けた上で、修士論文または特定の課題についての研究成果の審査及び試験に合格した者に、学位規則に従い修士の学位を授与する。

1) 国際コミュニケーションコースで育成する人材像

現代のグローバル社会や地域社会（いわゆるグローバル社会）では政治・経済・産業・教育他、あらゆる分野で交渉能力や表現能力が必要とされている。そのような現場では、単に語学力だけでのコミュニケーション能力では不十分で、客観的思考力や高度な推理・判断力が求められる。これらの能力の取得は2年間の修士論文での研究や教員からのマンツーマン指導等、学部教育ではできない教育環境のもとで可能となり、また、学部教育にはない特別なカリキュラムや演習等によって培われるものである。さらに、グローバル社会が要求する広範なニーズに対して学術的に貢献し、社会全体の発展に寄与するためには、国際的視野と幅広い教養、ならびに総合的で実践的な問題解決能力を身に付ける必要がある。言い換えれば、本コースでは国際社会における諸事象・諸問題を国際コミュニケーションの観点から分析・考察し、課題の理解と問題の解決に寄与する知識の構築及び発信に必要なスキルを学生が身に付けられるように指導する。

以上のように、国際コミュニケーションコースは、高度な英語力を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション能力

1) 国際言語学コースは、高度な国際言語力（特に英語力あるいは中国語力）を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション能力を有する人材を養成するためのコースである。言い換えれば、高度な国際言語力マインドに裏打ちされた質の高い、総合的判断力に優れた人材を養成するコースである。現代のグローバル社会や地域社会では政治・経済・産業・教育他、あらゆる分野で交渉能力や表現能力が必要とされている。そのような現場では、単に語学力だけでのコミュニケーション能力では不十分で、客観的思考力や高度な推理・判断力が求められる。これらの能力の取得は2年間の修士論文での研究や教員からのマンツーマン指導等、学部教育ではできない教育環境のもとで可能となり、また、学部教育にはない特別なカリキュラムや演習等によって培われるものである。

<p><u>を發揮できる人材を養成するためのコースであり、そのため本コースの学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー：<u>DP</u>）は、以下の3点とする。</u></p> <p><u>（ア）高い語学力と高度な国際コミュニケーション分野の知識を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション力を發揮できる能力を有する。（DP1-1）</u></p> <p><u>（イ）国際コミュニケーションの観点から専門的な研究を行うために必要な学術的思考力を身に付け、国際社会の課題や諸問題を理解し、論理的かつ批判的に分析する能力や問題・課題の解決に向けて提言・実行する能力を有する。（DP1-2）</u></p> <p><u>（ウ）グローバルな交渉現場に必要な、客観的思考力や高度な推理・判断力を常に向上させる意欲・関心・態度を有する。（DP1-3）</u></p>	<p>従って、本コースの学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）は、以下の3点である。</p> <p>（ア）高度な国際言語力（特に英語力あるいは中国語力）を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション能力を有する。</p> <p>（イ）高度な国際言語力マインドに裏打ちされた質の高い総合的判断力に優れた能力を有する。</p> <p>（ウ）グローバルな交渉現場に必要な、客観的思考力や高度な推理・判断力を有する。</p>
---	---

(是正事項) 国際教養研究科 国際教養学専攻 (M)

1 養成する人材像、3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーをいう。以下同じ。）の妥当性及び整合性について、以下の点を明確にするとともに必要に応じて適切に改めること。

(2) カリキュラム・ポリシーについて、「設置の趣旨等を記載した資料（本文）」には、構成や科目区分の考え方等の説明はあるが、ディプロマ・ポリシーのどの項目がカリキュラム・ポリシーのどの項目に対応するかが判然とせず、具体的な説明もなされていない。また、「資料2. 3つのポリシーの関係図」においても3つのポリシーの各項目の対応関係が示されていないため、ディプロマ・ポリシーの各項目とカリキュラム・ポリシーの各項目の対応関係を説明した上で、3つのポリシーの整合性についても明確になるよう、資料も含め適切に改めること。

(対応)

(2) ご指摘のとおり、各コースのカリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの対応の説明が不十分でした。そこで、資料2を資料2-1と変更し、図中に対応を示す線を挿入し明確にしました。さらに、3つのポリシーの整合性について、本文中でそれらの関連性を説明いたしました。

また、新たな資料として各科目とディプロマ・ポリシーの対応表を資料2-2として加え、実際のカリキュラムのどの科目がどのディプロマ・ポリシーに対応するのかを明確化しました。さらに、本文中におきましても、それぞれの科目がどのディプロマ・ポリシーに対応するかを明記いたしました。

修正しました【資料2-1. 3つのポリシーの関係図】(別紙資料①)及び新規で作成いたしました【資料2-2. 講義科目とディプロマ・ポリシーの対応表】(別紙資料②)、【資料2-3. 演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表】(別紙資料③)を本文書の後に別紙資料として添付いたしました。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (11 ページ)

新	旧
1. 編成の考え方 (カリキュラム・ポリシー) カリキュラム・ポリシーは育成する人材	1. 編成の考え方 (カリキュラム・ポリシー) カリキュラム・ポリシーは育成する人材

像、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシーと密接に関係しており、それらの関係を参考資料として添付した【資料2-1. 3つのポリシーの関係図】。また、カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの関係を示すために、各講義科目とディプロマ・ポリシーの対応表【資料2-2. 講義科目とディプロマ・ポリシーの対応表】及び各演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表【資料2-3. 演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表】を示した。

宮崎国際大学は学則に、国際的視野に立った教養と専門的知識・技術を修得し、文化の発展と人類の福祉に寄与する人材を育成することを謳っている。そのため、先に記したディプロマ・ポリシーでは、国際コミュニケーション力、国際社会の問題や課題の理解、それらに対する分析力や思考力、グローバルな交渉現場に必要な客観的思考力、及び高度な推理・判断力、国際文化に関する知識や異文化理解等を学位認定の基準として掲げている。そして、このディプロマ・ポリシーの達成のために必要な教育課程の編成、教育方法、教育内容をカリキュラム・ポリシーとして以下に掲げる。また、後述するがこれらのディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーに基づく教育内容等を踏まえ、アドミッション・ポリシーで、どのような学生を受け入れるかの方針が策定されている。

まず、グローバル社会で活躍するために必要な多国の異文化理解や国際問題や課題の理解、及び国際コミュニケーション力の

像、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシーと密接に関係しており、それらの関係を参考資料として添付した【資料2. 3つのポリシーの関係図】。

まず、グローバル社会で活躍するために必要な多国の異文化理解や国際言語の基礎能力を強化（両コースに偏らない基礎的素

基礎能力を強化（コースに偏らない基礎的素養の涵養）するために、「基盤共通科目（10単位）」を設け、国際コミュニケーションコース及び国際社会研究コースにおいて全員が必ず履修する必修単位とする。一方で、自分の将来の進路や自分の学びたい内容を考慮し、各自が選択できる「基盤選択科目（6単位以上）」を設ける。また、それぞれのコースにおいて、演習及び研究（修士論文研究）を行うための「コース別特別科目（14単位）」を設ける。なお、コース別特別科目においては、複数指導体制を取り、主指導教員1名、及び副指導教員2名を設け、副指導教員の1名は主指導教員とは別のコースから充てる。これにより、それぞれ異なった観点から幅広い指導が受けられるように配慮している。以下にそれらの必要性と概要を説明する。なお、基盤共通科目、基盤選択科目及びコース別特別科目、及びそれらに含まれる科目群とディプロマ・ポリシーとの関係については、【資料2-2. 講義科目とディプロマ・ポリシーの対応表】と【資料2-3. 演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表】にまとめているが、表の中でそれぞれのディプロマ・ポリシーの項目に対して、◎が主として、○がやや対応していることを示している。

1) 基盤共通科目の考え方

略

基盤共通科目は両コースの学生が全員受講しなければならない必修単位としている。

養の涵養) するために、「基盤共通科目（10単位）」を設け、国際言語学コース及び国際文化学コースにおいて全員が必ず履修する必修単位とする。一方で、自分の将来の進路を考慮し、各自が選択できる「基盤選択科目（6単位以上）」を設ける。また、それぞれのコースにおいて、演習及び研究（修士論文研究）を行うための「コース別特別科目（14単位）」を設ける。なお、コース別特別科目においては、複数指導体制を取り、主指導教員1名、及び副指導教員2名を設け、副指導教員の1名は主指導教員とは別のコースから充てる。これにより、それぞれ異なった観点から幅広い指導が受けられるように配慮している。以下にそれらの必要性と概要を説明する。

1) 基盤共通科目の考え方

略

この基盤共通科目は両コースの学生が全員受講しなければならない必修単位としてい

また、基盤共通科目をすべて履修することで、両コースのディプロマ・ポリシー(DP1-1からDP1-3及びDP2-1からDP2-3)のすべてに対応する。

2) 基盤選択科目の考え方

略

なお、「交流セミナー特論」は融合科目であり、コーディネーター教員のもとで、学生自らが企画し、他の学生の研究等を知ることによって、お互いの知識、技能を深めるとともに、外部招聘講師から最近の課題やトピックス等を提供してもらうものである。基盤選択科目は、両コースのディプロマ・ポリシーに重複して対応しているものが多いが、一部はコース別のディプロマ・ポリシーに傾斜している。

3) コース別特別科目の考え方

これは、コース別に設定された科目で、コース別の必修単位である。各コースで研究を遂行するために必要な基礎知識の履修及び専門的技術を修得するための科目（国際コミュニケーション学基礎演習及び国際社会研究基礎演習）があり、さらに修士論文作成のための科目（国際コミュニケーション学研究及び国際社会研究）がある。演習科目は、学生自らが疑問に思う課題を解決するためや、修士論文を作成する上で必要な技術を修得するために選択するもので、3科目以上（6単位以上）を履修しなければならない。

略

る。

2) 基盤選択科目の考え方

略

なお、「交流セミナー特論」は融合科目であり、コーディネーター教員のもとで、学生自らが企画し、他の学生の研究等を知ることによって、お互いの知識、技能を深めるとともに、外部招聘講師から最近の課題やトピックス等を提供してもらうものである。

3) コース別特別科目の考え方

これは、コース別に設定された科目で、コース別の必修単位である。各コースで研究を遂行するために必要な基礎知識の履修及び専門的技術を修得するための科目（国際言語学基礎演習及び国際文化学基礎演習）があり、さらに修士論文作成のための科目（国際言語学研究及び国際文化学研究）がある。演習科目は、学生自らが疑問に思う課題を解決するためや、修士論文を作成する上で必要な技術を修得するために選択するもので、3科目以上（6単位以上）を履修しなければならない。

略

(ア) 国際コミュニケーションコースでは、国際コミュニケーションを研究する上で必要となる知識、情報収集法、プレゼンテーション方法等の理論と技術を学ぶ科目を「国際コミュニケーション学基礎演習（6単位）」として開講する。これらに加えて、修士論文作成のための研究指導科目として「国際コミュニケーション学研究（8単位）」を設定する。これは主指導教員と副指導教員2名（主指導教員と同じコースから1名、他コースから1名）の3名で担当する。

(イ) 国際社会研究コースでは、
略

2. 編成の特色

略

1) 基盤共通科目（必修 10 単位）

略

「国際コミュニケーション概論（2単位）」:

略

さらに、一部はインターカルチュラル・コミュニケーション（異文化適応、文化パターン、自己概念等）についてもアクティブラーニングを主体とした学習システムで修得する。4名の外国人教員によるネイティブな英語授業であり、英語力や英語表現力のみならず、内容的に論理的思考力やディベート力等も養われる構成となっている。

この科目は DP1-1 から DP1-3 及び DP2-1、DP2-3 に対応している。

(ア) 国際言語学コースでは、国際言語を研究する上で必要となる知識、情報収集法、プレゼンテーション方法等の理論と技術を学ぶ科目を「国際言語学基礎演習（6単位）」として開講する。これらに加えて、修士論文作成のための研究指導科目として「国際言語学研究（8単位）」を設定する。これは主指導教員と副指導教員2名（主指導教員と同じコースから1名、他コースから1名）の3名で担当する。

(イ) 国際文化学コースでは
略

2. 編成の特色

略

1) 基盤共通科目（必修 10 単位）

略

「国際コミュニケーション概論（2単位）」:

略

さらに、一部はインターカルチュラル・コミュニケーション（異文化適応、文化パターン、自己概念等）についてもアクティブラーニングを主体とした学習システムで修得する。

「外国語教育学概論（2単位）」：主に、将来英語教育に関わる者、現在英語教育及び中国語教育に関わっている者等を念頭に、学部教育より高いレベルの外国語指導法を学ぶ。さらに外国語教育学の原理・原論や実際の授業や学習に関わる領域の理解を深める。具体的な例では、語彙、文法、リスニング、ヒアリング、ライティングの高度な指導方法や考え方を解説し、教材の選び方や学習評価方法、あるいは授業づくりの指導法をアクティブラーニング形式で講義する。また、一部は中国語教育法との比較等も学ぶ。この科目はDP1-1、DP1-2、DP2-1、DP2-3に対応している。

「情報処理学特論（2単位）」：

略

データ通信技術からスマートグリッド、そしてライフラインとしてのインターネットやセキュリティー、マルチメディア等を含む内容をアクティブラーニングで修得していく。内容的に高度な専門用語が入るために、日英の2カ国語を用いて行う。この科目は両コースにとって重要であり、DP1-2、DP2-2に対応している。

「国際文化・芸術学概論（2単位）」：

略

例えば、芸術作品の分析を通してそこに反映される社会意識や世界観等を理解する。特にアクティブラーニングを取り入れて、グローバルな文化の流れを多面的に解説しながら理解させる。この科目はDP1-2、DP2-1に主に対応しているが、教育方法等からDP1-3、DP2-2、DP2-3にも対

「外国語教育学概論（2単位）」：主に、将来英語教育に関わる者、現在英語教育に関わっている者等を念頭に、学部教育より高いレベルの指導法を学ぶ。さらに外国語教育学の原理・原論や実際の授業や学習に関わる領域の理解を深める。具体的な例では、語彙、文法、リスニング、ヒアリング、ライティングの高度な指導方法や考え方を解説し、教材の選び方や学習評価方法、あるいは授業づくりの指導法をアクティブラーニング形式で講義する。

「情報処理学特論（2単位）」：

略

データ通信技術からスマートグリッド、そしてライフラインとしてのインターネットやセキュリティー、マルチメディア等を含む内容をアクティブラーニングで修得していく。

「国際文化・芸術学概論（2単位）」：

略

例えば、芸術作品の分析を通してそこに反映される社会意識や世界観等を理解する。

応している。

「英語表現概論（2単位）」：グローバルな視点において、また、様々な場面に応じて、適切に英語で話すことや書くことができる能力を涵養し、併せて少人数教育システムを使って、論理的思考力や批判的思考力を養うための講義である。そのため、創作英語力を身に付け、日本と欧米の感覚の相違による表現の違いを理解し、学生には英語表現を楽しむような方向付けを行う。また、学術論文を作成する上で必要となる具体的なスキルについても学ぶ。この科目はDP1-1、DP2-3に主に対応するが、内容的にはDP1-3とDP2-2にも対応している。

2) 基盤選択科目（選択 6単位）

基盤選択科目は、学生それぞれのバックグラウンドと選択コースに沿って必要な基礎知識を履修するために設定された選択科目である。本研究科に進学した学生が、選択したコースに係わらず、科目を履修することが大きな特色である。オムニバス方式で行われるものと、そうでないものが含まれる。オムニバス方式で行われるものに関しては、責任者（コーディネーター）を配置し、担当する教員ごとの教育内容を点検・調整し、円滑な教育が行われる体制となっている。基盤選択科目に関しては、学期当初のオリエンテーションで、履修モデルとともに内容及び選択法を説明する。

「英語表現概論（2単位）」：グローバルな視点において、また、様々な場面に応じて、適切に英語で話すことや書くことができる能力を涵養し、併せて少人数教育システムを使って、論理的思考力や批判的思考力を養うための講義である。そのため、創作英語力を身に付け、日本と欧米の感覚の相違による表現の違いを理解し、学生には英語表現を楽しむような方向付けを行う。

2) 基盤選択科目（選択 6単位）

基盤選択科目は、学生それぞれのバックグラウンドと選択コースに沿って必要な基礎知識を履修するために設定された選択科目である。本研究科に進学した学生が、選択したコースに係わらず、科目を履修することが大きな特色である。オムニバス方式で行われるものと、そうでないものが含まれる。オムニバス方式で行われるものに関しては、責任者（コーディネーター）を配置し、担当する教員ごとの教育内容を点検・調整し、円滑な教育が行われる体制となっている。

<p>「交流セミナー特論（2単位）」： 略 専任教員が順番でコーディネーターを務め、学生による運営をサポートする。<u>この科目は DP1-1、DP2-2 に主として対応しており、DP1-3、DP2-3 にもやや対応している。</u></p> <p>「国際経済学特論（2単位）」 略 授業終了時には、国際経済における新たな課題を特定し、学んだ知識や経済分析モデルに基づいて課題に関する分析や議論を行うことが可能となる。<u>この科目は DP2-2 に主に対応しており、DP1-2、DP1-3 にもやや対応している。</u></p> <p>「環境・生命科学特論（2単位）」： 略 グローバルな環境と生態系の視点からの講義、国際的な食料問題や栄養科学の視点からの講義、あるいは新型コロナウイルス感染症等も含む医学的知識や生命科学的知識の視点からの講義を通して、環境と生命について学ぶ。<u>この科目は DP1-2 と DP2-2 に対応する。</u></p> <p>「数理・データサイエンス特論（2単位）」： 略 幸いに、本学は文部科学省による「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」の認定を受けており、学部教育においても充実した内容となっている。<u>この科目は主に DP1-2 に対応するが、DP2-2 にも対応している。</u></p>	<p>「交流セミナー特論（2単位）」： 略 専任教員が順番でコーディネーターを務め、学生による運営をサポートする。</p> <p>「国際経済学特論（2単位）」： 略 授業終了時には、国際経済における新たな課題を特定し、学んだ知識や経済分析モデルに基づいて課題に関する分析や議論を行うことが可能となる。</p> <p>「環境・生命科学特論（2単位）」： 略 グローバルな環境と生態系の視点からの講義、国際的な食料問題や栄養科学の視点からの講義、あるいは新型コロナウイルス感染症等も含む医学的知識や生命科学的知識の視点からの講義を通して、環境と生命について学ぶ。</p> <p>「数理・データサイエンス特論（2単位）」： 略 幸いに、本学は文部科学省による「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」の認定を受けており、学部教育においても充実した内容となっている。</p>
---	--

<p>「社会心理学特論（2単位）」： 略 社会的感情、社会的認知、社会的行動、社会的影響、集団行動、コミュニケーション、紛争解決、社会心理学研究法等の学修が予定されている。<u>この科目は主としてDP2-1に対応しているが、内容的にはDP1-3にも対応する。</u></p> <p>「英米文学特論（2単位）」： 略 併せて、作品のテーマ等に関するディスカッションやエッセイ・ライティングを実際に行うことで、英語での論理的な思考力、理論的な表現力も育成する。<u>この科目はDP2-1、DP2-2に対応する。</u></p> <p>「中国語特論（2単位）」： 略 文字・音声ともに多様性を有するが、多様性を有するがゆえに統合と分離という2つの方向性を持ちうる。中国語が持つ特徴を知ること、中国語圏の社会、文化にまで理解を広げ、中国語を通じた世界観を獲得する。<u>この科目はDP1-1に対応している。</u></p> <p>「日本教育史特論（2単位）」： 略 本授業では、文化接触の基礎理に触れるとともに、18世紀以降の国際的環境の中で、とりわけ中国との関連、欧米との関連を通じて、わが国において、どのような教育理念、制度、実践が形成されたのかを取り上げる。<u>本講義は例外的に日本語をメインにした英語とのバイリンガルでの講義にな</u></p>	<p>「社会心理学特論（2単位）」： 略 社会的感情、社会的認知、社会的行動、社会的影響、集団行動、コミュニケーション、紛争解決、社会心理学研究法等の学修が予定されている。</p> <p>「英米文学特論（2単位）」： 略 併せて、作品のテーマ等に関するディスカッションやエッセイ・ライティングを実際に行うことで、英語での論理的な思考力、理論的な表現力も育成する。</p> <p>「中国語特論（2単位）」： 略 文字・音声ともに多様性を有するが、多様性を有するがゆえに統合と分離という2つの方向性を持ちうる。中国語が持つ特徴を知ること、中国語圏の社会、文化にまで理解を広げ、中国語を通じた世界観を獲得する。</p> <p>「日本教育史特論（2単位）」： 略 本授業では、文化接触の基礎理に触れるとともに、18世紀以降の国際的環境の中で、とりわけ中国との関連、欧米との関連を通じて、わが国において、どのような教育理念、制度、実践が形成されたのかを取り上げる。</p>
---	---

る。学生の中に教育職希望者がいることを想定したものであるが、そうでなくても論理的あるいは客観的思考力を養うには有益な講義と思われる。その意味で、この科目は DP1 - 2、DP2 - 1、DP2 - 2 に対応している。

(改善事項) 国際教養研究科 国際教養学専攻 (M)

2 カリキュラム・ポリシーに学修成果の評価の在り方等に関する具体的な記述が見受けられないことから、適切に改めること。

(対応)

「カリキュラム・ポリシーに学修成果の評価の在り方」に関する全体的な記述を行っていませんでしたので、「IV 教育課程の編成の考え方及び特色 2. 編成の特色」の次に新たな項目3. として「カリキュラム・ポリシーにおける学習成果の評価」を記載し、挿入いたしました。そのため、以前の「3. 教育科目の単位の妥当性」を「4. 教育科目の単位の妥当性」といたしました。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (22 ページ)

新	旧
<u>3. カリキュラム・ポリシーにおける学習成果の評価</u> <u>講義及び演習科目の学習成果は、主にレポートや試験で評価されるが、その他にも下記のような評価を行うことがある。ディスカッションでの評価においては2つの形式があり、学生の理解度を確認するために教員と学生との間で1：1でのディスカッションを行う場合と、学生のグループ内でディスカッションを行う場合である。前者については、教員が学生に質問することで学生の理解度や、学生の考えを評価する。後者については、グループ内で各学生の表現力や内容等を客観的に評価する。プレゼンテーションの評価では、発表内容、表現力(英語での表現力等)、質問への対応力で総合的に評価する。また、オムニバス科目における成績評価は、それぞれの科目のコーディネーターがオムニバスの構成教員</u>	(追加)

による成績評価をまとめ、総合的に評価する。なお、各科目の具体的な評価方法はシラバスに記載されている。各授業科目の成績は「宮崎国際大学大学院学則第 29 条」の判定基準、A（秀）、B（優）、C（良）、D（可）、F（不可）の 5 種の評語をもって表し、A、B、C 及び D を合格とし、F を不合格とする。

また、最終的に提出される修士論文の評価は、学位論文審査細則【資料 5-1. 学位論文審査細則】に則り、修士論文の内容、修士論文発表会でのプレゼンテーション、発表会での質疑応答等によって行われ、宮崎国際大学大学院学則第 33 条に則り研究科委員会で合否が決定される。評価は研究科の判定基準により先の 5 種の評語をもって表し、A、B、C 及び D を合格とし、F を不合格とする。

(是正事項) 国際教養研究科 国際教養学専攻 (M)

3 「国際言語学コース」では、コース名及び学位名称に「国際言語学」を用いているが、言語学を学修する授業科目は「言語学演習」と「応用言語学演習」のみとなっていることから当該授業科目のみで十分な内容なのか判然とせず、また両科目では英語以外の言語は扱わないように見受けられるため、「国際言語学」という名称との整合性に疑義がある。さらに、両科目とも選択科目であるため、学生の判断により両科目を選択しなかった場合、「言語学」を学修していないにも関わらず、「言語学」を冠する学位を授与することとなるため、教育課程の妥当性に疑義がある。したがって、教育内容に合致したコース名及び学位名称になっているか明確に説明しつつ、必要に応じて改めること。

(対応)

ご指摘のとおり、「国際言語学」という名称に対し、取り扱う言語はほぼ「英語」、一部「中国語」であります。そのため、言語学よりも国際コミュニケーション学の方が名称の適合性は高いと考えました。その理由は、国際コミュニケーション概論、英語表現概論、中国語特論、外国語教育学概論等の科目内容に合っていること、授業が原則英語での講義であり、講義担当専任教員の半数が外国籍教員（ネイティブ英語を話す）であること、マンツーマンディスカッション、アクティブラーニング、少人数教育による講義形態であること等の特色を考慮すれば、十分にコミュニケーション能力が涵養できると思われれます。また、他大学にも国際コミュニケーション学の学位（修士）がございましたので、参考にさせていただきました。

この名称を変更しましても、基本的な内容の変化は必要無いと判断しています。対応いたしまして、名称の変更とディプロマ・ポリシーの一部の文言を修正いたしました。

なお、本意見への回答ではありませんが、「国際言語学」に関連して、実は令和5年度から下記（参考）の言語と文化の科目を学士教育に導入することとなっております。4年後には修士課程の科目のいくつかに採用するつもりで計画が進んでいます。これにより、グローバル社会で確実なコミュニケーション能力を有する人材養成に、より幅広い世界で寄与できると考えています。

参考（令和5年度国際教養学部 導入）

第3外国語と文化 Third Foreign Language and Culture

ポルトガル語とブラジル文化 Portuguese and Brazilian Culture

第3外国語と文化 Third Foreign Language and Culture
韓国語と韓国文化 Korean Language and Culture
中国語と中国文化 Chinese Language and Culture
ベトナム語とベトナム文化 Vietnamese Language and Culture
フランス語とカナダ文化 French Language and Canadian Culture
スペイン語とスペイン語圏文化 Spanish Language and Spanish-speaking Culture
ドイツ語とドイツ文化 German Language and Culture
アメリカの社会と文化 American Society and Culture

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (10、8 ページ)

新	旧
<p>(p.10)</p> <p>2. 専攻とコースの名称</p> <p>上記の宮崎国際大学大学院国際教養研究科に修士課程を置き、1 専攻、2 コースとする。専攻名は国際教養学専攻とし、「<u>国際コミュニケーションコース</u>」及び「<u>国際社会研究コース</u>」の2 コースを設置する。英文名称は国際<u>コミュニケーション</u>コースを Master of Arts in International <u>Communication</u> とし、国際<u>社会研究</u>コースを Master of Arts in <u>International Social</u> Studies とする。</p> <p>1 専攻2 コースとした理由は、先のディプロマ・ポリシーに記載した様に育成する人材像や学位授与の方針や、また、<u>入学希望者の要望</u>がこの2 コースで<u>多少異なる</u>からである。「<u>国際コミュニケーションコース</u>」では英語コミュニケーション能力の<u>向上</u>に重きを置いており、<u>グローバル社会</u>で<u>確実なコミュニケーション力を発揮</u>できる</p>	<p>2. 専攻とコースの名称</p> <p>上記の宮崎国際大学大学院国際教養研究科に修士課程を置き、1 専攻、2 コースとする。専攻名は国際教養学専攻とし、「<u>国際言語学コース</u>」及び「<u>国際文化学コース</u>」の2 コースを設置する。英文名称は国際言語学コースを Master of Arts in International Linguistics とし、国際文化学コースを Master of Arts in Intercultural Studies とする。</p> <p>1 専攻2 コースとした理由は、先のディプロマ・ポリシーに記載した様に育成する人材像や学位授与の方針がこの2 コースで異なるからである。「<u>国際言語学コース</u>」では国際言語や英語コミュニケーションに重きを置いており、「<u>国際文化学コース</u>」では多国の異文化理解に重きを置いているためである。そのため、カリキュラムの選択科目や、研究指導内容が異なっている。</p>

能力を有する人材を養成する。一方、「国際社会研究コース」では多国の異文化理解や国際社会事情（課題や問題）に重きを置いており、異文化の多様性を客観的に見つけ、それぞれの特徴を的確に判断できる能力や異文化に関する知識を身に付け、現代のグローバル社会のさまざまな課題に対し学際的研究ができる能力を有する人材を育成する。そのため、カリキュラムの選択科目や、研究指導内容が多少異なっている。また、この2コースを置くことで、外部からは、宮崎国際大学大学院国際教養研究科の修士課程がどのような内容の教育を行うのか、イメージし易くなると思われる。さらに、入学希望者の英語力（自己表現力、会話力、文法力他）には海外研修や海外生活の経験の有無、あるいは職歴等により、大きな差のあることが予想されることも2つのコースに分けた理由のひとつである（国際コミュニケーションコースは「高い語学力と高度な国際コミュニケーション分野の知識を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション力を発揮できる能力」をディプロマ・ポリシーで求めるが、国際社会研究コースは、その点を大きな達成目標とはしていない）。

3. 学位の名称

以下のとおりである。なお、国際教養学専攻に5名の学生定員を置く。

1) 国際コミュニケーションコース

入学定員 目安として2名

学位 修士（国際コミュニケーション）

また、この2コースを置くことで、外部からは、宮崎国際大学大学院国際教養研究科の修士課程がどのような内容の教育を行うのか、イメージし易くなると思われる。

3. 学位の名称

以下のとおりである。なお、国際教養学専攻に5名の学生定員を置く。

1) 国際言語学コース

入学定員 目安として2名

学位 修士（国際言語学）

ヨン学)

2) 国際社会研究コース

入学定員 目安として3名

学位 修士 (国際社会学)

(p.8)

1) 国際コミュニケーションコースで育成
する人材像

現代のグローバル社会や地域社会 (いわゆるグローバル社会) では政治・経済・産業・教育他、あらゆる分野で交渉能力や表現能力が必要とされている。そのような現場では、単に語学力だけのコミュニケーション能力では不十分で、客観的思考力や高度な推理・判断力が求められる。これらの能力の取得は2年間の修士論文での研究や教員からのマンツーマン指導等、学部教育ではできない教育環境のもとで可能となり、また、学部教育にはない特別なカリキュラムや演習等によって培われるものである。さらに、グローバル社会が要求する広範なニーズに対して学術的に貢献し、社会全体の発展に寄与するためには、国際的視野と幅広い教養、ならびに総合的で実践的な問題解決能力を身に付ける必要がある。言い換えれば、本コースでは国際社会における諸事象・諸問題を国際コミュニケーションの観点から分析・考察し、課題の理解と問題の解決に寄与する知識の構築及び発信に必要なスキルを学生が身に付けられるように指導する。

以上のように、国際コミュニケーションコースは、高度な英語力を身に付け、グロー

2) 国際文化学コース

入学定員 目安として3名

学位 修士 (国際文化学)

1) 国際言語学コースは、高度な国際言語力 (特に英語力あるいは中国語力) を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション能力を有する人材を養成するためのコースである。言い換えれば、高度な国際言語力マインドに裏打ちされた質の高い、総合的判断力に優れた人材を養成するコースである。現代のグローバル社会や地域社会では政治・経済・産業・教育他、あらゆる分野で交渉能力や表現能力が必要とされている。そのような現場では、単に語学力だけのコミュニケーション能力では不十分で、客観的思考力や高度な推理・判断力が求められる。これらの能力の取得は2年間の修士論文での研究や教員からのマンツーマン指導等、学部教育ではできない教育環境のもとで可能となり、また、学部教育にはない特別なカリキュラムや演習等によって培われるものである。

従って、本コースの学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー) は、以下の3点である。

バル社会で確実なコミュニケーション能力を發揮できる人材を養成するためのコースであり、そのため本コースの学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー：DP）は、以下の3点とする。

（ア）高い語学力と高度な国際コミュニケーション分野の知識を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション力を發揮できる能力を有する。（DP1-1）

（イ）国際コミュニケーションの観点から専門的な研究を行うために必要な学術的思考力を身に付け、国際社会の課題や諸問題を理解し、論理的かつ批判的に分析する能力や問題・課題の解決に向けて提言・実行する能力を有する。（DP1-2）

（ウ）グローバルな交渉現場に必要な、客観的思考力や高度な推理・判断力を常に向上させる意欲・関心・態度を有する。（DP1-3）

（ア）高度な国際言語力（特に英語力あるいは中国語力）を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション能力を有する。

（イ）高度な国際言語力マインドに裏打ちされた質の高い総合的判断力に優れた能力を有する。

（ウ）グローバルな交渉現場に必要な、客観的思考力や高度な推理・判断力を有する。

(是正事項) 国際教養研究科 国際教養学専攻 (M)

4 「国際文化学コース」では、コース名及び学位名称に「国際文化学」を用いていることについて、養成する人材像では、「国際的な問題に真剣に取り組む人材」を掲げ、授業科目でも「国際食糧問題」や「国際経済学」など国際的な社会問題を学修する教育課程となっているが、国際文化に関する授業科目は単独の授業科目として設定されておらず、授業内で数回実施されている程度であるように見受けられる。よって、教育課程が名称に一致しているか明確でなく、誤解を招く可能性があるため、教育内容に合致したコース名及び学位名称になっているか明確に説明しつつ、必要に応じて改めること。

(対応)

ご指摘のとおりでございます。国際文化学コースは国際的な環境、食糧問題や経済問題などに取り組む人材養成を目指しております。これらの問題・課題を知り、課題の解決に取り組む人材を育成するためには、国際文化はもとより、国際情勢、国際的課題他さまざまな分野を学び、かつ、ある程度の英語での発信力を必要といたします。そのため、それらの素養を養うための科目を配置していました。しかし、国際文化に関する科目は「国際文化・芸術概論」しかございませんでしたので、国際文化学コースでは、国際問題についての人材育成の趣旨が曖昧になったのは事実でございます。そこで、国際的な環境、食糧問題や経済問題あるいは文化・芸術を包含する名称を考え「国際社会学」を候補に挙げました。しかし、この「国際社会学」という名目の科目そのものは置いていません。また、「国際的な問題・課題を知り、課題の解決に取り組む」という姿勢に適合するコース名としては、「国際社会研究コース」が適当ではないかと考えました。他大学にも地域社会研究コースや国際社会研究コースがございましたので、参考にさせていただきました。このコース名の変更に伴い、若干文章を変更いたしました。基本的には、当初の文章に違和感は無かったです。

主な対応は、以下の3点です。

1. 国際文化学コースと学位の名称を、全ての箇所に変更いたしました。
2. アドミッション・ポリシーの1つを、「グローバルな視野と感性を持ち、国際問題に関心があり、国際的リベラルアーツを身に付けたい人を求めます。」と修正しました。
3. ディプロマ・ポリシーを一部修正いたしました。

なお、修正は是正事項3による国際言語学コースの名称変更と同時に行いましたので、修正文には前者（是正事項3に対する修正）の変更部も含まれております。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (10、8 ページ)

新	旧
<p>(p.10)</p> <p>2. 専攻とコースの名称</p> <p>上記の宮崎国際大学大学院国際教養研究科に修士課程を置き、1 専攻、2 コースとする。専攻名は国際教養学専攻とし、「<u>国際コミュニケーションコース</u>」及び「<u>国際社会研究コース</u>」の2 コースを設置する。英文名称は国際<u>コミュニケーションコース</u>を Master of Arts in International <u>Communication</u> とし、<u>国際社会研究</u>コースを Master of Arts in <u>International Social Studies</u> とする。</p> <p>1 専攻2 コースとした理由は、先のディプロマ・ポリシーに記載した様に育成する人材像や学位授与の方針や、<u>また、入学希望者の要望がこの2 コースで多少異なるからである。「国際コミュニケーションコース」では英語コミュニケーション能力の向上に重きを置いており、グローバル社会で確実なコミュニケーション力を発揮できる能力を有する人材を養成する。一方、「国際社会研究コース」では多国の異文化理解や国際社会事情 (課題や問題) に重きを置いており、異文化の多様性を客観的に見つけ、それぞれの特徴を的確に判断できる能力や異文化に関する知識を身に付け、現代のグローバル社会のさまざまな課題に対し学際的研究ができる能力を有する人材を育成する。</u>そのため、カリキュラムの選択科目や、研究指導内容が<u>多少</u>異なっている。また、この2 コースを置くことで、外部からは、宮崎国際大学大学院国際教養研究科</p>	<p>2. 専攻とコースの名称</p> <p>上記の宮崎国際大学大学院国際教養研究科に修士課程を置き、1 専攻、2 コースとする。専攻名は国際教養学専攻とし、「<u>国際言語学コース</u>」及び「<u>国際文化学コース</u>」の2 コースを設置する。英文名称は国際言語学コースを Master of Arts in <u>International Linguistics</u> とし、<u>国際文化学</u>コースを Master of Arts in <u>Intercultural Studies</u> とする。</p> <p>1 専攻2 コースとした理由は、先のディプロマ・ポリシーに記載した様に育成する人材像や学位授与の方針がこの2 コースで異なるからである。「<u>国際言語学コース</u>」では国際言語や英語コミュニケーションに重きを置いており、「<u>国際文化学コース</u>」では多国の異文化理解に重きを置いているためである。そのため、カリキュラムの選択科目や、研究指導内容が異なっている。また、この2 コースを置くことで、外部からは、宮崎国際大学大学院国際教養研究科の修士課程がどのような内容の教育を行うのか、イメージし易くなると思われる。</p>

の修士課程がどのような内容の教育を行うのか、イメージし易くなると思われる。さらに、入学希望者の英語力（自己表現力、会話力、文法力他）には海外研修や海外生活の経験の有無、あるいは職歴等により、大きな差のあることが予想されることも2つのコースに分けた理由のひとつである（国際コミュニケーションコースは「高い語学力と高度な国際コミュニケーション分野の知識を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション力を発揮できる能力」をディプロマ・ポリシーで求めるが、国際社会研究コースは、その点を大きな達成目標とはしていない。）。

3. 学位の名称

以下のとおりである。なお、国際教養学専攻に5名の学生定員を置く。

1) 国際コミュニケーションコース

入学定員 目安として2名

学位 修士（国際コミュニケーション学）

2) 国際社会研究コース

入学定員 目安として3名

学位 修士（国際社会学）

(p.8)

2) 国際社会研究コースで育成する人材像

国際社会研究コースは、グローバル化が進む現代社会の諸課題に対応するために、他国の文化・経済・人種の多様性を理解し、客観的に見つけ、それぞれの特徴を的確に把握できる能力を有する人材、また、

3. 学位の名称

以下のとおりである。なお、国際教養学専攻に5名の学生定員を置く。

1) 国際言語学コース

入学定員 目安として2名

学位 修士（国際言語学）

2) 国際文化学コース

入学定員 目安として3名

学位 修士（国際文化学）

2) 国際文化学コースは、他国の文化の多様性を客観的に見つけ、それぞれの特徴を的確に判断できる能力を有する人材を養成するためのコースである。グローバル化によって、多くの国際的な課題が見えて来た一方で、多くの問題がすでに山積してい

それらを題材に学術的研究のできる人材を養成するためのコースである。グローバル化によって多くの国際的な課題が見えてきており、すでに多くの問題が山積している。例えば文化の違いによる国際紛争、ジェンダー格差問題、地球温暖化、ごみ廃棄問題、それら以外の環境問題他、さまざまな問題である。そのため2015（平成27）年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の17項目のSDGsに対し、各国でさまざまな取組みが行われている。このような国際的な問題に真剣に取り組む人材が、政治、経済、産業界で必要とされている。そのような人材の育成にはダイバーシティ（他国の文化、民族、歴史、宗教、生活様式等）や国際社会のワーキングの仕組みの認識と理解が必要である。本コースでは、演習や個別の研究指導等を通して、豊かな学識と創造的な研究能力を備えた人材を育成する。
したがって、本コースの学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー：DP）は、以下の3点とする。

（ア）異文化の多様性を客観的に見つけ、それぞれの特徴を的確に判断できる能力や異文化に関する知識を有する。（DP2-1）

（イ）現代のグローバル社会のさまざまな課題に対し学際的研究ができる能力を有する。（DP2-2）

（ウ）英語でのプレゼンテーションやコミュニケーション力を有する。（DP2-3）

る。例えば文化の違いによる国際紛争、ジェンダー格差問題、地球温暖化、ごみ廃棄問題、それら以外の環境問題他、様々な問題である。そのため2015（平成27）年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の17項目のSDGsに対し、各国で様々な取組みが行われている。このような国際的な問題に真剣に取り組む人材が、政治、経済、産業界で必要とされている。そのような人材の育成にはダイバーシティ（他国の文化、民族、歴史、宗教、生活様式等）や国際社会のワーキングの仕組みの認識と理解が必要であり、より高度なコミュニケーション能力が不可欠となる。それらの能力を本コースのカリキュラムを通して涵養する。

従って、本コースの学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）は、以下の3点である。

- （ア）多国の文化の多様性を客観的に見つけ、それぞれの特徴を的確に判断できる能力や多国の異文化に関する知識を有する。
- （イ）国際的な問題に真剣に取り組むことができ、国際社会のワーキングの仕組みを認識し理解することができる。
- （ウ）高度なコミュニケーション能力を有する。

(是正事項) 国際教養研究科 国際教養学専攻 (M)

5 ディプロマ・ポリシー (ア) の「高度な国際言語力 (特に英語力あるいは中国語力)」とあるが、中国語力を身に付ける授業科目は、選択科目の「中国語特論」だけであるため、掲げるディプロマ・ポリシーに照らして教育課程が適切に編成されているか不明確である。このため教育課程の妥当性について明確に説明するか、必要に応じて適切に改めること。

(対応)

ご指摘のように、中国語を身に付ける科目は選択科目の「中国語特論」のみです。本学の学士課程には「中国語 1、中国語 2、中国文化」があり、本学の学生にとっては修士課程に進学後、中国語のさらなるスキルアップは望めるのですが、学外からの入学者にとりましては、中国語の選択は難しいかもしれません。しかし、国際コミュニケーションコースでは、中国語を選択していただきたいと考えており、学生のバックグラウンドに応じた授業方法を取りたいと思います。

そのため、履修指導におきましては、「ただし選択に際しては、入学当初のオリエンテーションにおいて、それぞれの科目についての説明を行い、各自が将来の進路を考えた上で基盤選択科目を選択できるように履修指導を行う。例えば中国語等に関しては、修士課程での講義は入門編ではないので多少難しいかもしれないが、国際コミュニケーションコースでは、初心者であっても履修して欲しい旨等を説明する。」を追加いたします。

一方で、ディプロマ・ポリシーに「高度な国際言語力 (特に英語力あるいは中国語力)」を全面的に掲げるのは、ご指摘のように、問題があると思われました。そこで、設置の趣旨や目的、育成したい人材や教育編成の内容そのものは変わりませんが、コースの名称を変更し、ディプロマ・ポリシーの表現等を修正することで対応させていただきたいと思います。特に、「中国語」と限定した表現は削除いたしました。是正事項 1 (1) で対応いたしました。

また、基盤選択科目の考え方の中に、12 ページ「さらに中国語は近年重要性が急激に増している第 2 外国語である。そのため、将来的にはこの中国語教育は担当教員を加える等により強化する計画である。」旨を記載させていただきました。これは中国語に関する専任教員を令和 5 年 4 月から学部追加することが決まっている (ただし、研究科担当は完成年度以降) こともございます。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (8、12、25 ページ)

新	旧
<p>(p.8)</p> <p>1) <u>国際コミュニケーションコースで育成する人材像</u> <u>(削除)</u></p> <p>現代のグローバル社会や地域社会 <u>(いわゆるグローバル社会)</u> では政治・経済・産業・教育他、あらゆる分野で交渉能力や表現能力が必要とされている。そのような現場では、単に語学力だけでのコミュニケーション能力では不十分で、客観的思考力や高度な推理・判断力が求められる。これらの能力の取得は2年間の修士論文での研究や教員からのマンツーマン指導等、学部教育ではできない教育環境のもとで可能となり、また、学部教育にはない特別なカリキュラムや演習等によって培われるものである。<u>さらに、グローバル社会が要求する広範なニーズに対して学術的に貢献し、社会全体の発展に寄与するためには、国際的視野と幅広い教養、ならびに総合的で実践的な問題解決能力を身に付ける必要がある。言い換えれば、本コースでは国際社会における諸事象・諸問題を国際コミュニケーションの観点から分析・考察し、課題の理解と問題の解決に寄与する知識の構築及び発信に必要なスキルを学生が身に付けられるように指導する。</u></p>	<p>1) 国際言語学コースは、高度な国際言語力（特に英語力あるいは中国語力）を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション能力を有する人材を養成するためのコースである。言い換えれば、高度な国際言語力マインドに裏打ちされた質の高い、総合的判断力に優れた人材を養成するコースである。現代のグローバル社会や地域社会では政治・経済・産業・教育他、あらゆる分野で交渉能力や表現能力が必要とされている。そのような現場では、単に語学力だけでのコミュニケーション能力では不十分で、客観的思考力や高度な推理・判断力が求められる。これらの能力の取得は2年間の修士論文での研究や教員からのマンツーマン指導等、学部教育ではできない教育環境のもとで可能となり、また、学部教育にはない特別なカリキュラムや演習等によって培われるものである。</p>

<p><u>以上のように、国際コミュニケーション</u> <u>コースは、高度な英語力を身に付け、グロー</u> <u>バル社会で確実なコミュニケーション能力</u> <u>を発揮できる人材を養成するためのコース</u> <u>であり、そのため本コースの学位授与の方</u> <u>針（ディプロマ・ポリシー：DP）は、以下</u> <u>の3点とする。</u></p> <p><u>（ア）高い語学力と高度な国際コミュニケ</u> <u>ーション分野の知識を身に付け、グローバ</u> <u>ル社会で確実なコミュニケーション力を発</u> <u>揮できる能力を有する。（DP1-1）</u></p> <p><u>（イ）国際コミュニケーションの観点から</u> <u>専門的な研究を行うために必要な学術的思</u> <u>考力を身に付け、国際社会の課題や諸問題</u> <u>を理解し、論理的かつ批判的に分析する能</u> <u>力や問題・課題の解決に向けて提言・実行</u> <u>する能力を有する。（DP1-2）</u></p> <p><u>（ウ）グローバルな交渉現場に必要な、客</u> <u>観的思考力や高度な推理・判断力を常に向</u> <u>上させる意欲・関心・態度を有する。（DP1</u> <u>-3）</u></p> <p>(p.12)</p> <p>2) 基盤選択科目の考え方 略</p> <p>さらに中国語は近年重要性が急激に増して いる第2外国語である。<u>そのため、将来的</u> <u>にはこの中国語教育は担当教員を加える等</u> <u>により強化する計画である。</u></p> <p>(p.25)</p> <p>2. 履修指導、研究指導の方法 宮崎国際大学大学院国際教養研究科の専</p>	<p>従って、本コースの学位授与の方針（ディ プロマ・ポリシー）は、以下の3点であ る。</p> <p>（ア）高度な国際言語力（特に英語力あるい は中国語力）を身に付け、グローバル社会で 確実なコミュニケーション能力を有する。</p> <p>（イ）高度な国際言語力マインドに裏打ち された質の高い総合的判断力に優れた能力 を有する。</p> <p>（ウ）グローバルな交渉現場に必要な、客観 的思考力や高度な推理・判断力を有する。</p> <p>2) 基盤選択科目の考え方 略</p> <p>さらに中国語は近年重要性が急激に増して いる第2外国語である。</p> <p>2. 履修指導、研究指導の方法 宮崎国際大学大学院国際教養研究科の専</p>
--	--

任教員が指導を担当する。学生は定められた基盤共通科目（必修）を履修するとともに、基盤選択科目を学生が各自選択して履修する。ただし選択に際しては、入学当初のオリエンテーションにおいて、それぞれの科目についての説明を行い、各自が将来の進路を考えた上で基盤選択科目を選択できるように履修指導を行う。例えば中国語等に関しては、修士課程での講義は入門編ではないので多少難しいかもしれないが、国際コミュニケーションコースでは、初心者であっても履修して欲しい旨等を説明する。

任教員が指導を担当する。学生は定められた基盤共通科目（必修）を履修するとともに、基盤選択科目を学生が各自選択して履修する。後者については、入学当初のオリエンテーションにおいて、それぞれの科目についての説明を行い、各自が将来の進路を考えた上で選択できるように履修指導を行う。

(是正事項) 国際教養研究科 国際教養学専攻 (M)

6 選択必修科目として「国際文化学基礎演習」及び「国際言語学基礎演習」という授業科目が設定されているように見えるが、実際は両授業科目の中に更に幾つかの授業科目が設定され、そのうち「3科目以上(6単位以上)」を履修することになっており、どの科目を選択するかは学生の判断によるため、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づいた教育課程が適切に編成されているか不明確である。このため、教育課程の妥当性を説明するか、必要に応じて適切に改めること。

(対応)

ご指摘に従い、まず、演習科目がどのディプロマ・ポリシーに相当するかを資料2-3「演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表」に示し、これをオリエンテーション時での説明資料とすることにいたしました。また、本文中にもその旨記載いたしました。

次に、各演習科目の概要をそれぞれ記載し、ディプロマ・ポリシーの対応を本文中に入れました。科目名のみからでは、ディプロマ・ポリシーの対応の理由が不明確なものもあり、そのための処置です。例えば、外国籍の教員によるマンツーマン演習や少人数での対話形式の演習、プレゼンテーション形式等での演習では、演習内容以外に英語表現力や英語コミュニケーション力は著しく向上すると思われまます。この点は、本学の英語による学士教育で証明されています。そのため、本文中に「本演習は外国人教員が担当するため、英語コミュニケーション力も向上することが期待できる」旨の記載を加えました。

どの演習科目を選択するかは、学生が研究テーマを遂行する上でも重要なものになります。そのため、主指導教員は学生の研究テーマを決定する時、誰の演習を受けさせるかを慎重に選ばなければなりません。副指導教員として学生の研究テーマに適合する教員2名を選択しますが、恐らくその副指導教員の演習科目を選択する可能性が高いであろうと推測できます。

是正事項6への対応は以下の3点で行いました。

1. 演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表【資料2-3. 演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表】の作成
2. 各演習科目の概要とディプロマ・ポリシーの対応を本文中に記載
3. 履修方法を修正・加筆【資料3. 各コースの履修モデル】

新規の【資料2-3. 演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表】(別紙資料③)、修正を加えた【資料3. 各コースの履修モデル】(別紙資料④)及び【資料4. 入学から修了までのプロセス】(別紙資料⑤)を本文書の後に添付いたしました。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (11、18、25 ページ)

新	旧
<p>(p.11)</p> <p>1. 編成の考え方 (カリキュラム・ポリシー)</p> <p>カリキュラム・ポリシーは育成する人材像、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシーと密接に関係しており、それらの関係を参考資料として添付した【資料2-1. 3つのポリシーの関係図】。また、<u>カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの関係を示すために、各講義科目とディプロマ・ポリシーの対応表【資料2-2. 講義科目とディプロマ・ポリシーの対応表】及び各演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表【資料2-3. 演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表】を示した。</u></p>	<p>1. 編成の考え方 (カリキュラム・ポリシー)</p> <p>カリキュラム・ポリシーは育成する人材像、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシーと密接に関係しており、それらの関係を参考資料として添付した【資料2. 3つのポリシーの関係図】。</p>
<p>(p.18)</p> <p>3) コース別特別科目 (選択必修 14 単位)</p> <p>コースごとの科目として設定されている選択必修単位であり、各専門分野で研究を遂行するために必要な基礎知識及び専門的技術を修得するための科目 (演習) があり、さらに修士論文作成のための科目 (研究) がある。</p> <p>これらの研究科目では、学生は選択した研究課題について、指導教員 1 名及び副指導教員 2 名 (うち 1 名は異なるコースの教員) からなる複数の教員の指導を受ける体制となっていることが特色である。したがって、<u>少なくとも 1 科目は他コースの副指</u></p>	<p>3) コース別特別科目 (選択必修 14 単位)</p> <p>コースごとの科目として設定されている選択必修単位であり、各専門分野で研究を遂行するために必要な基礎知識及び専門的技術を修得するための科目 (演習) があり、さらに修士論文作成のための科目 (研究) がある。</p> <p>これらの研究科目では、学生は選択した研究課題について、指導教員 1 名及び副指導教員 2 名 (うち 1 名は異なるコースの教員) からなる複数の教員の指導を受ける体制となっていることが特色である。したがって、研究指導科目においても、各学生は</p>

導教員の演習科目を選択する可能性が大きくなる。研究指導科目においても、各学生は国際コミュニケーションコースと国際社会研究コースの両分野から、それぞれ異なった観点による幅広い指導を受けることができる。各学生は、指導教員及び副指導教員による十分な指導を受けて研究計画を策定し、その研究計画の下に実験の実施と理論の展開を行い、修士研究論文を作成することができる。

(ア) 国際コミュニケーションコースでは、国際コミュニケーション学研究に必要な知識、情報収集法、基礎的研究方法に関する理論と方法を学ぶ科目を「国際コミュニケーション学基礎演習（6単位）」として開講する。これらに加えて、修士論文作成のための研究指導科目として、「国際コミュニケーション学研究（8単位）」を設定する。

「国際コミュニケーション学基礎演習」は以下の科目群からなり、詳しい内容等はシラバスに記載しているが、以下にそれらの概略とディプロマ・ポリシーとの関係を示す。

「情報処理学演習」:国際コミュニケーションコースにおいては、情報の収集や情報の処理能力の涵養も重要である。また、この科目は外国人教員による小人数での演習のため、英語のコミュニケーション力の向上が期待できる。基本的にはコンピューターのテクノロジーリテラシーを提供する。また、さまざまな運用システム、操作方法、コンピュー

国際文化学コースと国際言語学コースの両分野から、それぞれ異なった観点による幅広い指導を受けることができる。各学生は、指導教員及び副指導教員による十分な指導を受けて研究計画を策定し、その研究計画の下に実験の実施と理論の展開を行い、修士研究論文を作成することができる。

(ア) 国際言語学コースでは、国際言語学研究に必要な知識、情報収集法、基礎的研究方法に関する理論と方法を学ぶ科目を「国際言語学基礎演習（6単位）」として開講する。これらに加えて、修士論文作成のための研究指導科目として、「国際言語学研究（8単位）」を設定する。

ターネットワーク設定の調査、及びコンピュータとネットワークに関連するセキュリティ問題の拡張等を、対話形式で実際の PC を利用して教授する。また、情報管理システムと現在の技術動向や一般的な文章や図作成のアプリケーションに関する高度な概念について説明し、画像操作、コマンドラインについても学ぶ。これらの技術は文書や高度なプレゼンテーションを作成する上で極めて有用である。そのため、この演習科目は DP1 - 1 から DP1 - 3 及び DP2 - 2、DP2 - 3 に対応している。

「データサイエンス応用演習」：統計・検定は多くの分野で用いられる。データ、例えば、社会調査における信頼性の検定がそれにあたる。サンプリング数が多い場合の正規分布を用いる検定、サンプル数が少ない時の T 検定等について演習を行う。その他の検定 (F 検定、カイ 2 乗検定) についての演習も行う。この演習科目は DP1 - 2 及び DP2 - 2 に対応している。

「英語教育演習」：今日の日本の英語教育は、大きな転換期を迎えて、多くの課題がある。本演習では、その中でも直接授業に関連するテーマを選び、理論を踏まえ実際にどのように対応し、授業実践に繋がれば良いかを考察する。具体的なテーマは、「英語による授業」の進め方、CLIL 理論の導入、コミュニケーションを促し育成するための教材作成、コミュニケーション能力の評価方

法である。最終的には、それらを踏まえ英語による模擬授業を課す。この演習科目は DP1-1 から DP1-3 に対応している。

「日本語人類学演習」：この科目も外国人教員による少人数での演習であり、教員と学生間で意見を交わす形式で行われる。英語のコミュニケーション力の向上が期待できる。題材として、グローバルな観点から見出される本学問分野での問題についての文献を用い、日本における言語人類学の多様な領域とアプローチの例を紹介する。基礎的アプローチや例示的なケーススタディを含む、専門的かつ実践的なトピックについて文献を読み、議論を行う。主要な分野として、言語習得、変化、バリエーション、パフォーマンス、イデオロギー、メディア、多言語主義、グローバリゼーションなどが挙げられる。学生は理解度およびスキル応用の修得状況を示すため、ケーススタディをひとつ選択し、縮小された規模で再現を行う。この演習科目は DP1-1 から DP1-3 に対応している。

「応用言語学演習」：この科目も外国人教員による少人数での演習であり、教員と学生間で意見を交わす形式で行われるため、英語のコミュニケーション力の向上が期待できる。この演習では、応用言語学におけるさまざまな問題やテーマ、そして研究の異なる手法を探究する。主なテーマとしては、形式と意味に

それぞれ焦点を当てた指導法、テスト、第二言語修得、言語が社会的目的にどのように使用されているか、言語態度、言語の多様性、言語教育政策の批判的考察等が挙げられる。学生はこれらのテーマに関する重要な研究を読み、議論をする。さらに、学生は自身で小さな研究プロジェクトを行う。この演習科目は主に DP1 - 1、DP1 - 2 に対応しているが、DP1 - 3、DP2 - 1、DP2 - 3 にも対応している。

(イ) 国際社会研究コースでは、国際社会研究に必要な知識、情報収集法、基礎的研究方法に関する理論と方法を学ぶ科目を「国際社会研究基礎演習 (6 単位)」として開講する。これらに加えて、修士論文作成のための研究指導科目として、「国際社会研究 (8 単位)」を設定する。

「国際社会研究基礎演習」は以下の科目群からなり、詳しい内容等はシラバスに記載しているが、以下にそれらの概略とディプロマ・ポリシーとの関係を示す。

「国際環境生命学演習」：種々の環境要因、人工産物が生体に及ぼす事例を農薬や環境ホルモンを例に紹介し、そのメカニズムについての研究を演習として行う。
例えば世界で広く使用されている農薬の「ネオニコ」はヨーロッパでは規制が始まった。これは、農産物 (米や果実) に付着し、それが人体で蓄積されてニコチン様作用が持続するからである。す

(イ) 国際文化学コースでは、国際文化学研究に必要な知識、情報収集法、基礎的研究方法に関する理論と方法を学ぶ科目を「国際文化学基礎演習 (6 単位)」として開講する。これらに加えて、修士論文作成のための研究指導科目として、「国際文化学研究 (8 単位)」を設定する。

に地域によってはミツバチの消滅や池の魚介類の消滅が起こっている。このような事例の作用機序（メカニズム）や、対処法等を考えられる能力を演習で培う。この演習科目は DP2 - 2 及び DP1 - 2 に対応している。

「情報マネージメント・セキュリティ演習」：

この演習では、基本的なセキュリティの原則と情報管理の基礎を築くことから始める。科目の内容を確実に理解できるようにするために、基本的ではあるが未知の概念を理解する必要がある。本演習の後半では、セキュリティ違反とそれを発生させてしまう恐れがある方法を扱い、そして問題に対処する方法について述べる。最後に、情報セキュリティを向上させる方法について説明する。学生は、選択したひとつの研究事例を発表し、内容についての理解を示す機会が与えられる。本演習は外国人教員が担当するため、英語コミュニケーション力も向上することが期待できる。この科目は主に DP2 - 2 に対応するが、DP2 - 3 及び DP1 - 2、DP1 - 3 にも対応している。

「国際食料問題演習」：

21 世紀は、人口爆発に伴い食資源・水資源、土地（農地）が不足し、偏在する。遺伝資源や食品にも汚染が懸念され、流通、廃棄物処理、さらには経済格差、貧困等、人類の生存が世界的危機を迎える。世界の人口は主に最貧国を中心に爆発的に増加することが予測されている。これに伴い食料不足による飢餓と栄養不良等の問題等が

発生する他、水資源や土地（農地）不足に加えて環境汚染等も懸念されている。加えて、近年、二酸化炭素等の排出増加に伴う地球規模の温暖化による気候変動は、人類の生存に係る食料生産に影響を及ぼすことが強く指摘されている。本講では、「環境・生命科学特論」で取り扱う内容や修士論文に関するテーマについて演習形式で学修・討論し、より深い知識・考察力を育成する。この演習科目は主に DP2 - 2 に対応するが、DP1 - 2、DP2 - 1 にも対応している。

「データサイエンス演習」：データサイエン

スは、データの収集・集計・解析・公表からなり、学術研究での調査分析をはじめ、論文を作成する上で重要な演習である。単変量分析として、変量から度数分布（ヒストグラム）・標準偏差・平均値の計算、ヒストグラム（度数分布）及び正規分布による度数分布の近似、解析結果の公表の方法について演習を行う。また、2つ以上の変量間の関係についてクロスデータ分析をする方法についても演習を行う。学んだ方法を実データ（気象、金融、統計等）に対して適用し、解析・発表を行う。この演習科目は DP2 - 2 及び DP1 - 2 に対応している。

「英米文学演習」：英米の主要な短編を教材

として、英文読解力（リーディング）、ライティングを中心に、物語の効果的な読み方、語彙力を育成するとともに、英語によるディスカッションによって作品の背後にある英米の歴史、文化にも関

する知識を修得する。この演習科目は DP2-1 に主に対応するが、DP1-1、DP1-3 及び DP2-3 にも対応している。

「日本教育史学演習」：本科目は、日本の教育が直面している国際的にも重要な下記の諸問題について、現状とこれからの課題を歴史的アプローチから認識し、その解決策を理論的・実証的に考察できることを狙っている。そのためわが国の基本文献・資料と、外国文献・資料（翻訳、原書）の読解、受講参加者との協議、学校現場の参観、及び教育行政のヒアリング等を通じて、日本の教育の展開に関する基礎演習を行う。この演習科目は DP2-2 及び DP1-3 に対応している。

「地域文化学演習」：リージョナリズム、ローカリズム、そしてグローバリズムは今日の世界において重要なトピックである。一国の中でのサブカルチャータ的な差の基礎となる、物理的な環境的コンテキストの影響について調査する。さらには行政の合併、地域性の再評価、グローバルゼーションやモビリティなどの現代的発展と併せて、社会的歴史もその場所の特有性に重要であることを考査する。学生はこれらの問題について考え、地域が現在直面している問題についてさらなる解決策についてブレインストーミングする。本演習は外国人教員が担当するため、英語コミュニケーション力も向上することが期待できる。この演習科目は DP2-1 に主に対応するが、DP2-2、DP2-3 及び DP1-1 にも対応している。

「社会心理学演習」：グローバル社会で活躍

する人材育成のためには、「本質的に社会的存在である人間の性質」について自分なりの考え方を持つことが有効であると考えられる。なぜなら、いかなる問題も根本的には人間に係わる問題であるため、人間の本質についての深い洞察力が問題解決には不可欠であると推測されるからである。本科目においては、グローバル社会において活躍する人材育成のために特に重要と思われる諸研究と、それらから得られた知見について教育的ビデオ視聴および原著論文や関連ウェブサイトの精査等を通して学び、ディスカッションを行いながら、「本質的に社会的存在である人間の性質」とは何かを学生ひとりひとりが構築していく。この演習科目は主に DP2-1 に対応するが、DP1-2、DP1-3 及び DP2-2、DP2-3 にも対応している。

「数理統計分析学演習」：学術的研究におい

ては、応用数学的な理論に基づく分析が必要になることがある。統計的な分析方法の理論は、線形代数と微分積分によって成り立っている。統計的な分析方法の数理的な理論を学ぶために、基本となるベクトルと行列の定義と四則計算、 Σ 記号の意味と計算、各種行列（転置行列、逆行列、直交行列）固有値・固有ベクトル、ベクトル微分を理解する。そして、統計的な分析方法として記述統計、標本分布と正規分布、t 検定、相関係数、回帰分析、主成分分析、因子分析、数量化III

類、効果量について、エクセルやRを用いてデータ分析を通じて学ぶ。この演習科目はDP1-2及びDP2-2に対応している。

「国際経済学演習」：国際経済は、パンデミック、環境問題、貿易戦争、保護主義、ナショナリズム、サプライチェーンの混乱、グリーンエネルギー社会への移行など、未曾有の不確実性に直面している。このような状況では、創造的で実現可能な解決策が求められる。そのため、この演習では国際経済について必須な研究と分析について提議する。学生は学び、議論し、自らの分析を報告・発表する。学生は、現代の国際経済学で興味のある特定の問題を追求し、修士論文を視野に入れ発展させる。この演習科目は外国籍教員によるもので、主にDP2-2に対応しているが、DP2-3及びDP1-1、DP1-2にも対応している。

「グローバル生態学演習」：生物多様性が生じ、維持されるメカニズムについて概観する。生物の種間相互作用が生物多様性に与える影響について、国内外の昨今の研究（植物の花と送粉者、植物と植食者、寄生者と宿主）をレビューし、受講者で議論する。そして、国内外で生じる生物多様性の危機に対する科学的な対処方法を考える演習を行う。この演習科目は主にDP2-2に対応するがDP1-2にも対応している。

(p.25)

2. 履修指導、研究指導の方法

略

まず、オリエンテーション時の説明では、コース別履修モデル【資料3. 各コースの履修モデル】、各科目とディプロマ・ポリシーの対応表【資料2-2. 講義科目とディプロマ・ポリシーの対応表】【資料2-3. 演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表】、各科目のシラバス、各研究指導担当教員の研究テーマを資料として配布し、それらを基に説明する。また、修士論文については、シラバスに修士論文のテーマの設定から論文の作成、発表の一連の流れの指導を示しており、それについての説明とともに、修士論文提出に必要な事項を記した規程類や審査方法等についても説明する。なお、日本語が不自由な学生(留学生)や英語が不自由な日本人を考慮し、オリエンテーションにおける説明は、日本語と英語の両方で行う。

オリエンテーションでの説明後には、各学生は自分の研究したい内容に最も適合する研究テーマ、あるいはオリエンテーションで紹介された研究テーマで最も興味のあるものを選択し、研究指導教員を決定する。学生に選択された指導教員は、研究科委員会で承認を受けた後、学生との個別協議により、以下の履修指導を行う。

まず、入学から修了までの具体的なプロセスについての協議を行い、学生が修士論文作成までの流れを理解しているかを確認する。次に、修士論文作成のための研究テーマを決め、それに関連する副指導教員

2. 履修指導、研究指導の方法

略

日本語が不自由な学生(留学生)や英語が不自由な日本人を考慮し、オリエンテーションにおける説明は、日本語と英語の両方で行う。講義は原則として英語で行うが、日本語で行う場合には、講義資料は英文・和文の両者を用意する。

研究においては、学生ごとに研究テーマを設定し、主指導教員1名及び副指導教員2名が、履修指導及び研究指導を行う。

2名を決定する。以後、研究指導においては3名体制で行う。

学生は主指導教員及び2名の副指導教員との協議によって研究計画を策定し、その研究計画に従って実験や理論を展開し進める。3名の指導教員は学生に対して以下の指導を行う。なお、修了までの指導プロセスの基本は以下のとおりであり、参考資料を添付した【資料4. 入学から修了までのプロセス】。

学生は指導教員の研究指導に基づいて研究計画を策定し、その研究計画に従って実験や理論を展開し進める。指導教員は学生に対して以下の指導を行う。修了までの指導プロセスは以下のとおりであり、参考資料を添付した【資料4. 入学から修了までのプロセス】。

(改善事項) 国際教養研究科 国際教養学専攻 (M)

7 「情報処理学特論」、「環境・生命科学特論」、「社会心理学特論」、「日本教育史特論」の4つの授業科目のシラバスについて、「学生に対する評価」では、「出席」を学生に対する評価として設定しているが、授業への出席そのものを評価するという不適切な評価内容のようにも見受けられることから、適切な記載に改めること。

(対応)

ご指摘のとおりでございます。出席はあくまで評価に関する資格（定期試験の受験資格、最終口頭試験受験資格、評価レポート提出資格等）の基準であり、出席そのものを評価点に入れることはできません。以下の科目に対しては、シラバス中に下記のような修正を行いました。

「情報処理学特論」：1～12回の講義と13～15回の講義に関してそれぞれレポートを提出させ、前者は80点満点、後者は20点満点で採点し、合計を評価点とする。なお、レポートはコメントを付して返却する。

「環境・生命科学特論」：1～4回、5～8回、9～15回のそれぞれの講義担当者がレポートの課題を与え、それらのレポートの点数を集計して、最終評価点を出す。なお、レポートはコメントを付して返却する。

「社会心理学特論」：レポート50%、質疑応答での理解度（口頭試問）50%として総合評価する。なお、レポートはコメントを付して返却する。

「日本教育史特論」：4つの課題についてレポートを提出させ、1課題25点として採点し、100点満点とする。なお、レポートはコメントを付して返却する。

上記の科目の修正したシラバスを本文書の「シラバス（抜粋）」（別紙資料⑥）として添付しております。

(新旧対照表) シラバス (15、34、41、49 ページ)

新	旧
(p.15) 「情報処理学特論」： <u>1～12回の講義と13～15回の講義に関してそれぞれレポートを提出させ、前者は80点満点、後者は20点満点で採点</u>	「情報処理学特論」：出席および最終レポートで評価する。なおレポートはコメントを記して返却する。

<p><u>し、合計を評価点とする。なお、レポートはコメントを付して返却する。</u></p> <p>(p.34)</p> <p>「環境・生命科学特論」：<u>1～4回、5～8回、9～15回のそれぞれの講義担当者がレポートの課題を与え、それらのレポートの点数を集計して、最終評価点を出す。なお、レポートはコメントを付して返却する。</u></p> <p>(p.41)</p> <p>「社会心理学特論」：<u>レポート50%、質疑応答での理解度（口頭試問）50%として総合評価する。なお、レポートはコメントを付して返却する。</u></p> <p>(p.49)</p> <p>「日本教育史特論」：<u>4つの課題についてレポートを提出させ、1課題25点として採点し、100点満点とする。なお、レポートはコメントを付して返却する。</u></p>	<p>「環境・生命科学特論」：出席および最終レポートで評価する。なおレポートはコメントを記して返却する</p> <p>「社会心理学特論」：授業中に提示される課題へのレポートおよび出席状況の結果により総合評価を行う。評価の割合はレポートが50%、授業中の質疑応答や出席状況を50%とする。</p> <p>「日本教育史特論」：学生の成績評価は出席点を50点とする。最終的にはレポートを提出させ、その点数を50点満点で採点し、両者の合計で評価する。</p>
---	---

(改善事項) 国際教養研究科 国際教養学専攻 (M)

8 専任教員の年齢構成が高齢に偏っていることから、教育研究の継続性の観点から、若手教員の採用計画など、教員組織の将来構成を明確にすること。

(対応)

大学院を有していない本学が、発足当初から大学院の管理運営を問題なく行うためには、どうしても大学院教育、研究科の管理運営の経験者が必要で、高齢者を多く配置させていただきました。しかし、指摘されましたように、継続性の観点から、今後の教員配置につきましては、以下のように考えています。

1. 現在の国際教養学部には博士号を有する若手の優秀な外国籍教員（歴史・宗教学、経済・起業学、社会学等）が多数育ってきています。また、同様に教育学部の方でもそれは明らかです。今回、5名の学生定員に対して、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーはもちろんです。指導教員数のバランスや、大学院指導経験の有無等を考慮して教員を配置いたしました。将来的には現在 30～45 歳の博士号所有の外国籍教員に参加していただくことを考えています。
2. 公募により、優先的に若い優秀な教員を雇用・補充する考えです。また、若い教員比率を増加させるために新たな科目（第3言語学、国際文化学、哲学と宗教等）を追加し、修士課程をより充実させて行く計画であり、その際にも若い優秀な教員の採用を考えています。
3. 教員組織の将来構想（質の保証他）の中で、大学院修士課程の質を継続的に保証するためには、学生の修士論文の判定基準（V 4. 「修士論文の資格審査体制・方法・基準」）の厳守はもちろんです。研究科教員の資格審査（研究指導教員、研究補助教員、講義担当教員等の）基準が非常に重要と考えています。そのため、研究科教員の資格審査基準の策定及び大学院担当教員の自己点検・評価基準の策定を考えています。しかし、これらは設置後の研究科委員会において議論すべき課題と思っています。

以上の点を含み、文章を修正加筆いたしました。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (36 ページ)

新	旧
<p>3. 教員組織の職位別年齢構成</p> <p>専任教員の職位別年齢構成は、様式第3号(その3の1)に示すとおりである。</p> <p>略</p> <p>研究科担当教員に、高齢者が多いのは否めないが、教育水準と研究レベルの質を維持し、さらに修士課程を将来的に向上させるためには、現時点では必要と思われる。一方で、<u>現在の国際教養学部には博士号を有する若手の優秀な外国籍教員(歴史・宗教学、経済・起業学、社会学等)が複数育ってきている。これは教育学部でも同様である。本大学院修士課程の2年後以降の退職や異動による欠員が生じた際の教員の補充時には、彼らが有力な候補になると思われるが、当然のことながら公募による選考を行い、優先的に若い優秀な教員を雇用・補充する。</u>また、若い教員比率を増加させるために新たな科目(<u>第3言語学や国際文化学、哲学と宗教等</u>)を追加し、<u>修士課程をより充実させて行く計画であり、その際にも若い優秀な教員の採用を考えている。</u></p> <p><u>大学院修士課程の質を継続的に保証するためには、学生の修士論文の判定基準(V4. 修士論文の資格審査体制・方法・基準)の厳守はもちろんであるが、研究科教員の資格審査(研究指導教員、研究補助教員、講義担当教員等の)基準の策定及び大学院担当教員の自己点検・評価基準の策定</u></p>	<p>3. 教員組織の職位別年齢構成</p> <p>専任教員の職位別年齢構成は、様式第3号(その3の1)に示すとおりである。</p> <p>略</p> <p>研究科担当教員に、高齢者が多いのは否めないが、教育水準と研究レベルの質を維持し、さらに修士課程を将来的に向上させるためには、現時点では必要と思われる。一方で、本大学院修士課程の2年後以降を考え、定年退職後の教員採用時には、優先的に若い優秀な教員を雇用する。また、若い教員比率を増加させるために、新たな科目制定(韓国語特論、フランス語特論、哲学特論等)を行い、若い優秀な教員採用も考えている。</p>

<p>が必要であり、これらは設置後の研究科委員会において議論の上で策定される。</p>	
---	--

審査意見への対応を記載した書類（6月）（資料）

（目次）国際教養研究科 国際教養学専攻（M）

別紙資料①	【資料2-1. 3つのポリシーの関係図】	2
別紙資料②	【資料2-2. 講義科目とディプロマ・ポリシーの対応表】	3
別紙資料③	【資料2-3. 演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表】	4
別紙資料④	【資料3. 各コースの履修モデル】	5
別紙資料⑤	【資料4. 各入学から修了までのプロセス】	7
別紙資料⑥	シラバス（抜粋）	8

宮崎国際大学国際教養専攻の教育方針

(アドミッシン・ポリシー・ポリシー、カリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーの関係)

アドミッシン・ポリシー

本研究科は、グローバル化やSDGs等を背景に、多国籍文化に関する知識を深め、国際言語を活用しながら世界または地域で活躍できる人材、または英語力を深めて専門分野（教職関係等）で活躍できる人材の養成を主眼としており、世界の文化・社会交流の発展、国内での国際言語教育の発展に寄与することを使命にしている。したがって、本研究科は次のような人材を求めます。

- 1) 国際コミュニケーションコース
 - (ア) 英語の基礎学力と日常的な会話を有し、英語表現力・英語コミュニケーション力をさらに向上させたい人を求めます。
 - (イ) 修士論文執筆に必要な、基本的な分析力、批判的読解能力と論理的表現能力、ITリテラルの基礎、当該の専門分野における学部レベルの基礎的な知識を身に付けている人を求めます。
 - (ウ) 大学院で身に付けた専門分野を活かして社会に貢献したい人を求めます。
- 2) 国際社会研究コース
 - (ア) グローバルな視野と感性を持ち、国際問題に関心があり、国際的リベラルアーツを身に付けたい人を求めます。
 - (イ) 修士論文執筆に必要な、基本的な分析力、批判的読解能力と論理的表現能力、ITリテラルの基礎的な知識を身に付けている人を求めます。
 - (ウ) 大学院で身に付けた専門分野を活かして国際社会で活躍する意欲を有している人を求めます。

カリキュラム・ポリシー

グローバル社会で活躍する上で必要な基礎能力を涵養するために、全員が履修する「基礎共通科目」を設け、また、各自の将来の進路を考慮して選べる「基礎選択科目」を設けている。さらに、専門性をより高めるために、それぞれのコースにおいて、「コース別特別科目」が設けられている。

「基礎共通科目」と「基礎選択科目」では、両コースの教員が協働して、それぞれの得意分野・専門分野について教育を行う。研究科の設置趣旨に則って、国際的な文化の多様性、国際環境問題、国際経済問題他、情報処理関係等、様々な分野における専門性とコミュニケーション力を高めるために、幅広く知識が修得できる。また、交流セミナーを通して、学生同士が発表会を企画し、外部講師を招いての討論会を行うなど、能動的アクティブラーニングを取り入れ、本学のメリットを生かした教育システムを活用する。

「コース別特別科目」においては、複数指導体制を取り、それぞれ異なった観点から幅広い指導が受けられる様に配慮する。

国際コミュニケーションコースでは、国際コミュニケーションを研究する上で必要となる知識、情報収集法、プレゼンテーション方法など理論と技術を学ぶ科目を「国際コミュニケーション学基礎演習」として開講する。

国際社会研究コースでは、国際社会を研究する上で必要となる知識、情報収集法、プレゼンテーション方法など理論と技術を学ぶ科目を「国際社会研究基礎演習」として開講する。

ディプロマ・ポリシー

本大学院学則に規定する修業年限以上在学し、所定の単位数を修得し、下記の各コースの目標とする素養を身に付けたと確認され、修士論文の最終試験に合格した者に修士の学位を与える。

- 1) 国際コミュニケーションコース
 - (ア) 高い語学力と高度な国際コミュニケーション分野の知識を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション力を発揮できる能力を有する。
 - (イ) 国際コミュニケーションの観点から専門的な研究を行うために必要な学術的思考力を身に付け、国際社会の課題や諸問題を理解し、論理的かつ批判的に分析する能力や問題・課題の解決に向けて提言・実行する能力を有する。
 - (ウ) グローバルな交渉現場に必要な、客観的思考力や高度な推理・判断力を常に向上させる意欲・関心・態度を有する。

【学位】修士（国際コミュニケーション学）

- 2) 国際社会研究コース
 - (ア) 異文化の多様性を客観的に見つけ、それぞれの特徴を的確に判断できる能力や異文化に関する知識を有する。
 - (イ) 現代のグローバル社会のさまざまな課題に対し学際的研究ができる能力を有する。
 - (ウ) 英語でのプレゼンテーションやコミュニケーション力を有する。

【学位】修士（国際社会学）

資料2-2. 講義科目とディプロマ・ポリシーの対応表

カリキュラム・ポリシー	科目	国際コミュニケーションコースのディプロマ・ポリシー (DP1)			国際社会研究コースのディプロマ・ポリシー (DP2)		
		DP1-1	DP1-2	DP1-3	DP2-1	DP2-2	DP2-3
グローバルに活躍する場面に定着し、面コースの学生が身に付けておくべき基礎となる知識。他国との交渉や会議でのコミュニケーション能力、異文化理解、国際言語力、情報分析・処理能力等は共通した教養である。また英語教育者としての素養を向上する。	国際コミュニケーション概論	◎	○	○	○		
	外国語教育学概論	◎	○		○		◎
	情報処理学特論		◎		◎		
	国際文化・芸術学概論		◎	○	◎	○	○
	英語表現概論	◎		○		○	◎
	交流セミナー特論 (融合科目)	◎		○		◎	○
	国際経済学特論		○	○		◎	
	環境・生命科学特論		◎			◎	
	数理・データサイエンス特論		◎				○
	社会心理学特論			○		◎	
自分の将来の進路等に応じて自由に選択できる。「環境・生命科学特論」や「社会心理学特論」は、科学的に脳の仕組みや感情・心理の仕組みを知ること、教育力や交渉力を向上させる狙いである。「数理・データサイエンス特論」は、諸外国や地域の産業経済の分析に基づく企画や交渉に必要と思われる。エビデンスに基づいた理論展開を目指している。また「英米文学特論」は、英米の文学、歴史、社会を学び、代表する英語圏の歴史的背景や国際感覚を身に付けるためのものである。さらに中国語は近年重要性が急激に増している第2外国語である。なお、「交流セミナー特論」は融合科目であり、コーディネーター教員のもとで、学生自らが企画し、他の学生の研究等を知ること、お互いの知識、技能を深めるとともに、外部招聘講師から最近の課題やトピックス等を提議してもらおうものである。	英米文学概論				◎	○	
	中国語特論	◎					
	日本教育史特論				◎	○	◎
	DP1-1	高い語学力と高度な国際コミュニケーション分野の知識を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション力を発揮できる能力を有する。					
	DP1-2	国際コミュニケーションの観点から専門的な研究を行うために必要な学術的思考力を身に付け、国際社会の課題や諸問題を理解し、論理的かつ批判的に分析する能力や問題・課題の解決に向けて提言・実行する能力を有する。					
	DP1-3	グローバルな交渉現場に必要な、客観的思考力や高度な推理・判断力を常に向上させる意欲・関心・態度を有する。					
	DP2-1	異文化の多様性を客観的に見つめ、それぞれの特徴を的確に判断できる能力や異文化に関与する知識を有する。					
	DP2-2	現代のグローバル社会のさまざまな課題に対し学際的研究ができる能力を有する。					
	DP2-3	英語でのプレゼンテーションやコミュニケーション能力を有する。					

資料2-3. 演習科目とディプロマ・ポリシーの対応表

カリキュラム・ポリシー	科目	国際コミュニケーションコースのディプロマ・ポリシー (DP1)					国際社会研究コースのディプロマ・ポリシー (DP2)		
		DP1-1	DP1-2	DP1-3	DP2-1	DP2-2	DP2-3		
<p>各コースで研究を遂行するために必要な基礎知識の履修及び専門的技術を修得するための科目（国際コミュニケーション学基礎演習及び国際社会研究基礎演習）があり、さらに修士論文作成のための科目（国際コミュニケーション学研究及び国際社会研究）がある。演習科目は、学生自らが疑問に思う課題を解決するためや、修士論文を作成する上で必要な技術を修得するために選択するもので、3科目以上（6単位以上）を履修しなければならない。</p> <p>研究科目は指導教員や副指導教員（2名のうち、1名は他コースから選ぶ）の指導を受け、研究計画を策定し、その研究計画の下に実験の実施と理論の展開を行い、研究論文を2年間で作成する。</p>	国際コミュニケーション学基礎演習	情報処理学演習	○	◎	○				
		データサイエンス応用演習		◎					
		英語教育演習		◎	○				
		日本語人類学演習		◎	○				
		応用言語学演習		◎	○			○	
		国際環境生命学演習			○			◎	
		情報マネジメント・セキュリティ演習			○			◎	
		国際食料問題演習			○			◎	
		データサイエンス演習			◎			◎	
		英米文学演習	○		○			◎	
		日本教育史学演習			○			◎	
		地球文化学演習	○					◎	
		社会心理学演習			○			◎	
		数理統計分析学演習			◎			◎	
	国際経済学演習	○		○			◎		
	グローバル生態学演習			○			◎		
	DP1-1	高い語学力と高度な国際コミュニケーション分野の知識を身に付け、グローバル社会で必要なコミュニケーション力を発揮できる能力を有する。							
	DP1-2	国際コミュニケーションの観点から専門的な研究を行うために必要な学術的思考力を身に付け、国際社会の課題や諸問題を理解し、論理的かつ批判的に分析する能力や問題・課題の解決に向けて提言・実行する能力を有する。							
	DP1-3	グローバルな交渉現場に必要な、客観的思考力や高度な推理・判断力を常に向上させる意欲・関心・態度を有する。							
	DP2-1	異文化の多様性を客観的に見つけ、それぞれの特徴を的確に判断できる能力や異文化に関する知識を有する。							
	DP2-2	現代のグローバル社会のさまざまな課題に対し学際的研究ができる能力を有する。							
	DP2-3	英語でのプレゼンテーションやコミュニケーション力を有する。							

資料3. 各コースの履修モデル

国際コミュニケーションコース

Master of Arts in International Communication

アドミッション・ポリシー

- (ア) 英語の基礎学力と日常的な会話力を有し、英語表現力・英語コミュニケーション力をさらに向上させたい人を求めます。
- (イ) 修士論文執筆に必要な、基本的な分析力、批判的読解能力と論理的表現能力、ITリテラシー、当該の研究分野における学部レベルの基礎的な知識を身につけている人を求めます。
- (ウ) 大学院で身に付けた専門分野を活かして社会に貢献したい人を求めます。

カリキュラム・ポリシー

- (ア) 国際的な文化の多様性、国際問題、国際経済他、情報処理関係他、国際言語等様々な分野における専門性を高めます。
- (イ) 英語表現、英語教育、国際コミュニケーションを涵養する科目が設置されています。
- (ウ) 国際コミュニケーションの観点から専門的な研究を行うために必要な学術的思考力を身に付ける科目が設置されています。

教育課程

科目別シラバスを参考にしてください。

	1年	2年
基盤共通科目 (5科目すべてを受講してください。)	すべて講義 (10単位) ・国際コミュニケーション概論 ・外国語教育学概論 ・情報処理学特論 ・国際文化・芸術学概論 ・英語表現概論	履修終了
基盤選択科目 (3科目以上を選択してください。ただし、●科目の中から最低2科目は選択してください。)	交流セミナー以外は講義 (6単位以上) ●・交流セミナー特論 ●・環境・生命科学特論 ●・数理・データサイエンス特論 ・社会心理学特論 ・英米文学特論 ●・中国語特論	●・国際経済学特論 ●・日本教育史特論
コース別特別科目	演習・研究 (14単位) 文献調査・研究計画策定 資料等準備・データ、文献収集・学会発表 ・国際コミュニケーション学基礎演習 ・国際コミュニケーション学研究	修士論文作成 学会発表・学術論文投稿など

ディプロマ・ポリシー

- (ア) 高い語学力と高度な国際コミュニケーション分野の知識を身に付け、グローバル社会で確実なコミュニケーション力を発揮できる能力を有する。
- (イ) 国際コミュニケーションの観点から専門的な研究を行うために必要な学術的思考力を身に付け、国際社会の課題や諸問題を理解し、論理的かつ批判的に分析する能力や問題・課題の解決に向けて提言・実行する能力を有する。
- (ウ) グローバルな交渉現場に必要な、客観的思考力や高度な推理・判断力を常に向上させる意欲・関心・態度を有する。

【学位】 修士 (国際コミュニケーション学)

就職・進路

国外、国内、県内など、色々な視野に立って活躍できる場が広がります。

- 学部教育で中学校英語教員、高校英語教員、小学校教員 (小2免) の資格を取った方は、その道へ就職できます。その他、
- 公務員、●金融機関 ●企業 ●ホテル・サービス業 ●大学院博士課程進学
- 流通、情報通信分野 ●サービス

国際社会研究コース

Master of Arts in International Social Studies

アドミッション・ポリシー

- (ア) グローバルな視野と感性を持ち、国際問題に関心があり、国際的リベラルアーツを身に付けたい人を求めます。
- (イ) 修士論文執筆に必要な、基本的な分析力、批判的読解能力と論理的表現能力、ITリテラシー、当該の研究分野における学部レベルの基礎的な知識を身に付けている人を求めます。
- (ウ) 大学院で身に付けた専門分野を活かして国際社会で活躍する意欲を有している人を求めます。

カリキュラム・ポリシー

- (ア) 国際的な文化の多様性、国際問題、国際経済他、情報処理関係他様々な分野における専門性を高めます。
- (イ) 英語コミュニケーション能力を高めます。
- (ウ) 国際社会を研究する上で必要となる知識、情報収集法、プレゼンテーション方法など理論と技術を学びます。

教育課程

科目別シラバスを参考にしてください。

	1年	2年
基盤共通科目 (5科目すべてを受講してください。)	すべて講義(10単位) ・国際コミュニケーション概論 ・外国語教育学概論 ・情報処理学特論 ・国際文化・芸術学概論 ・英語表現概論 履修修了	
基盤選択科目 (3科目以上を選択してください。ただし、●科目の中から最低2科目は選択してください。)	交流セミナー以外は講義(6単位以上) ●・交流セミナー特論 ●・環境・生命科学特論 ●・数理・データサイエンス特論 ●・社会心理学特論 ●・英米文学特論 ●・中国語特論	●・国際経済学特論 ●・日本教育史特論
コース別特別科目	演習・研究(14単位) 文献調査・研究計画策定 資料等準備・データ、文献収集・学会発表 ・国際社会研究基礎演習・国際社会研究	修士論文作成 学会発表・学術論文投稿など

ディプロマ・ポリシー

- (ア) 異文化の多様性を客観的に見つけ、それぞれの特徴を的確に判断できる能力や異文化に関する知識を有する。
- (イ) 現代のグローバル社会のさまざまな課題に対し学際的研究ができる能力を有する。
- (ウ) 英語でのプレゼンテーションやコミュニケーション力を有する。

【学位】 修士(国際社会学)

就職・進路

国外、国内、県内など、色々な視野に立って活躍できる場が広がります。

- 公務員 ●金融機関 ●企業 ●ホテル・サービス業 ●航空業界 ●大学院博士課程進学
- 流通、情報通信分野 ●サービス 他

資料4. 入学から修了までのプロセス

	1年	2年
基盤 共通 科目	<p>【専攻必修 講義】(10単位) (1年前期)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際コミュニケーション概論 ・外国語教育学概論 履修修了 ・情報処理学特論 ・国際文化・芸術学概論 ・英語表現概論 	
基盤 選択 科目	<p>【専攻選択 講義・演習】(6単位以上)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交流セミナー特論(融合科目) (1～2年) ・環境・生命科学特論(1年後期) ・数理・データサイエンス特論 (1年後期) ・社会心理学特論(1年後期) ・英米文学特論(1年後期) ・中国語特論(1年後期) 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際経済学特論(2年前期) ・日本教育史特論(2年前期) <p>履修修了</p>
コ ー ス 別 特 別 科 目	<p>【コース必修演習・研究】(14単位)</p> <p>文献調査・研究計画策定</p> <p>国際社会研究コース</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際社会研究基礎演習 ・国際社会研究 <p>国際コミュニケーションコース</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際コミュニケーション学基礎演習 ・国際コミュニケーション学研究 	<p>資料等準備・データ、文献収集・学会発表</p> <p>学会発表・学術論文作成</p> <p>1月末学位審査申請</p>
備 考	<p>4月 入学式</p> <p>オリエンテーション</p> <p>履修指導</p> <p>指導教員(主1名副2名)届出</p> <p>履修申請書届出</p>	<p>1月末 学位論文申請</p> <p>3月 学位授与</p> <p>学位申請資格可否</p> <p>審査委員選定</p> <p>公開審査 最終試験</p> <p>学位授与の決定</p>

別紙資料⑥ シラバス（抜粋）

授業科目名 Course Name	情報処理学特論 Advanced Studies in Information Processing	教員名 Course Instructor(s)	Anderson Passos 保田 昌秀
		Eメールアドレス E-mail	Passos apassos@sky.miyazaki-mic.ac.jp 保田 myasuda@sky.miyazaki-mic.ac.jp
授業形態 Class Format	講義 Lectures	オフィスアワー Office Hours	講義後に対応 After class
科目番号 Course Code		担当形態 Mode of Instruction (Solo / Omnibus / Jointly)	オムニバス Omnibus
単位数 No. of Credits	2	配当年次 Allocated Year	1年前期 Spring, 1st Year
		卒業要件 Required or Elective to Graduate	必修 Required
到達目標 Goals	<ol style="list-style-type: none"> 1. Explain the outline of the content management system. 2. Understand the legal system for ICT. 3. Understand the safety framework for leaks. 4. Explain some of the algorithms currently in use. 5. Explain the strengths and weaknesses by comparing different applications and programs. 6. Understand the basics of analyzing and understanding large datasets. 7. Explain the social importance of AI. 8. Explain the strengths and weaknesses of tablet lessons and distance learning. <ol style="list-style-type: none"> 1. コンテンツマネージメントシステムについての概要を説明できる。 2. ICTについての法制度を理解している。 3. 漏洩などに対する安全フレームワークが理解できている。 4. 現在使用されているアルゴリズムの幾つかを説明できる。 5. 様々なアプリケーションやプログラムを比較して、長所と短所が説明できる。 6. 大規模なデータセットを分析・理解するための基本を理解している。 7. AIの社会的重要性が説明できる。 8. タブレットを用いる授業法および遠隔授業の長所と短所が説明できる。 		

<p>授業の概要 Course Overview</p>	<p>This course is designed to provide students with an understanding of the workings of IT and the IT-related knowledge required in global society and industry, as well as the concept of IT technology for problem solving. The course is based on an active learning approach and covers topics ranging from data communication technology to smart grids, lifelines and the internet, security and multi-media.</p> <p>現代社会あるいはグローバル社会で急速に進歩するIT化および情報ネットワークを理解し、グローバル社会や産業界で必要とされるIT関連知識を学ぶとともに問題解決のためのIT技術の考え方を学ぶ。データ通信技術からスマートグリッド、そしてライフラインとしてのインターネットやセキュリティー、マルチメディア等を包含した内容をアクティブラーニングで教示する。</p>
<p>ディプロマ・ポリシーとの関係 Diploma Policy Objectives</p>	<p>DP1-2 国際コミュニケーションの観点から専門的な研究を行うために必要な学術的思考力を身に付け、国際社会の課題や諸問題を理解し、論理的かつ批判的に分析する能力や問題・課題の解決に向けて提言・実行する能力を有する。</p> <p>Acquire the academic cogitative skills necessary to conduct specialized research from the perspective of international communication, understand and logically as well as critically analyze issues and topics of the international community, and has the ability to make proposals and take action to solve these issues.</p> <p>DP2-2 現代のグローバル社会のさまざまな課題に対し学際的研究ができる能力を有する。</p> <p>Acquire the ability to conduct interdisciplinary research on a range of issues that exist in the modern global society.</p>
<p>履修条件・注意事項 Prerequisites / Remarks</p>	
<p>授業計画 Course Schedule</p>	<p>(Anderson Passos)</p> <p>1. Introduction. This lesson will define “Information Processing” and will draw connections with many other areas of our lives. Students will have a preview of the course topics and see the progression.</p> <p>(和訳) はじめに、この授業では、「情報処理」とは何かを定義し、私たちの生活の様々な分野との関連性を示す。学生はコースのトピックを予習し、コースの進行を確認する。</p> <p>2. Information Contents. In this lecture, students will learn the basics of Content Management Systems (CMS), basic roles and permission settings and will have the opportunity to have hands-on experience.</p> <p>(和訳) 情報コンテンツ学。この回では、CMS (Content Management System) の基礎知識、基本的な役割や権限設定を学び、実際に体験をする。※授業の課題は CMS の上で提出する。</p> <p>3. Social Media. Students will study how social media has taken over the world. This lecture will look at social media from various point of views (e.g., social, economic).</p> <p>(和訳) ソーシャルメディア。ソーシャルメディアがどのように世界を席卷しているかを学ぶ。この講義では、ソーシャルメディアを様々な視点 (社会的、経済的など)</p>

から検証する。

4. Law and Management of Information Security I & II. This lesson will use case-studies of problems concerning technology and law. Students will be given real-world examples and will discuss on the different approaches and the coverage of the legal system when it comes to ICT.

(和訳) 情報セキュリティ法務経営論 I & II。この授業では、テクノロジーと法律に関する問題をケーススタディとして取り上げる。学生は実際の例に基づき、ICTに関連する法制度の異なるアプローチと適用範囲について議論する。

5. This lesson will show students why we need to think carefully about our actions when using computers. Study cases will be brought to class and students will discuss it as a group.

(和訳) この授業では、コンピュータを使用する際に、なぜ自分の行動について注意深く考える必要があるのかを学生に示す。授業では、学習事例を持ち寄り、グループでディスカッションを行なう。

6. Information Privacy. This lecture will discuss the risks of information leak and the necessity of more secure frameworks when exchanging information among systems.

(和訳) 情報プライバシー。情報漏洩のリスクと、システム間で情報をやり取りする際により安全なフレームワークの必要性について説明する。

7. Network and Information. This lecture will cover the basics of network communication, explore some of its characteristics and explore how those can be used as vulnerabilities to compromise information stored in computer systems.

(和訳) ネットワークとセキュリティ。この講義では、ネットワーク通信の基本を説明し、その特徴を探り、それらがどのようにしてコンピュータシステムに保存されている情報を侵害するための脆弱性として利用されるかを探る。

8. Basics of Cryptography. This lesson will explore the basics of cryptography and explore some of the algorithms used nowadays. Students will have the chance to compare different applications/programs and understand their merits and demerits.

(和訳) 暗号化の基礎。暗号の基本を学び、現在使用されているアルゴリズムのいくつかについて調べる。また、様々なアプリケーションやプログラムを比較し、そのメリット・デメリットを理解する機会を設ける。

9. Basics of Project Management. In any industry, project management skills are well received. In this lecture, students will be exposed to specific terms in the project management area, will learn about the history of project management and will have the chance to be part of a small project.

(和訳) プロジェクト管理の基本。どの業界でも、プロジェクト・マネジメントのスキルは評価される。この講義では、プロジェクト・マネジメント分野の具体的な用語に触れ、プロジェクト・マネジメントの歴史を学び、小さなプロジェクトに参加する機会を作る。

10. Basics of Data Science. With storage prices becoming cheaper by the day, the quantity of data stored in computer systems has skyrocketed. In this lesson students will learn basic tools to help analyze and understand big datasets.

(和訳) データサイエンスの基礎。ストレージ媒体の価格が安くなるにつれ、コンピュータシステムに保存されるデータの量は急増している。この授業では、大規模なデータセットを分析・理解するための基本的なツールを学ぶ。

11. Management of Information Technology. With so many tools available, computer users are usually overloaded with options to complete basic or advanced tasks. This lesson will bring

	<p>model-cases for students to discuss the best technology to be used in each case. (和訳) 情報技術経営論。多くのツールがあるため、コンピュータユーザーは基本的な作業から高度な作業まで、行うための選択肢は多い。この授業では、モデルケースを用意し、それぞれのケースに最適なテクノロジーを議論する。</p> <p>12. Frontier of Informatics. New technologies like AI and self-driving cars are taking our society by storm. In this lecture, students will be discussing some of the issues associated with such systems. (和訳) 情報フロンティア。AIや自動運転車などの新しい技術が、私たちの社会に旋風を巻き起こしている。この講義では、そのようなシステムにまつわる問題点を学生は議論する。</p> <p>(保田 昌秀)</p> <p>13. 小学校GIGAスクールなどICT技術の教育現場での活用が求められている。そこで、次の観点からICT技術を活用した授業法について授業を行う。一つ目は、小学校で多用されている授業支援ソフト「ロイロノート・スクール」などを使った模擬授業の実習を行う。 Utilization of ICT technology in educational settings such as elementary school GIGA schools is required. Therefore, from the following viewpoints, we will give lessons on lesson methods that utilize ICT technology. The first is to practice mock lessons using the lesson support software "LoiLoNote School," which is often used in elementary schools.</p> <p>14. タブレットを用いる効果的な授業方法などについてのグループワークで検討する。 We will discuss effective lesson methods using tablets in group work.</p> <p>15. タブレットを用いる授業法および遠隔授業のメリット・デメリット等についての調査研究をグループワークで行う。 Group work will be conducted on the advantages and disadvantages of teaching methods using tablets and distance learning.</p>
<p>学生に対する 評価 Assessment Criteria</p>	<p>Students will be required to submit reports on lectures 1-12 and 13-15, respectively, and the former will be graded on a 80-point scale and the latter on a 20-point scale, with the total being the evaluation score. The reports will be returned with comments. 1～12回の講義と13～15回の講義に関してそれぞれレポートを提出させ、前者は80点満点、後者は20点満点で採点し、合計を評価点とする。なお、レポートはコメントを付して返却する。</p>
<p>時間外の学習 について Preparation and Revision outside Class</p>	<p>In each class, a preview of the next class will be given and tasks will be presented for students to prepare. Also, after each class, try to be able to explain the topics discussed in your own words. Study in more detail and use office hours to ask questions and do not leave them unclear. 毎回、次回の予告を行い、課題を提示するので予め調べておくこと。また、講義の後は、自分の言葉で説明できるように努めること。さらに詳しく勉強し、オフィスアワー等を利用して、不明な個所を質問し、わからないままにしないこと。</p>

テキスト Textbooks	Materials will be distributed. 資料を配布する
参 考 書 ・ 参考資料等 References	

授業科目名 Course Name	環境・生命科学特論 Advanced Studies in Environmental and Life Sciences	教員名 Course Instructor(s)	村上 昇 福田 亘博 田川 一希
		Eメールアドレス E-mail	村上 nmurakami@edu.miyazaki-mic.ac.jp 福田 mfukuda@sky.miyazaki-mic.ac.jp 田川 ktagawa@edu.miyazaki-mic.ac.jp
授業形態 Class Format	講義 Lectures	オフィスアワー Office Hours	(村上) 金曜日 12 : 00～ Murakami: 12:00- Fridays (福田) 金曜日 12 : 00 Fukuda: 12:00 Fridays (田川) 月曜日 16:20- Tagawa: 16:20- Mondays
科目番号 Course Code		担当形態 Mode of Instruction (Solo / Omnibus / Jointly)	オムニバス Omnibus
単位数 No. of Credits	2	配当年次 Allocated Year	1年後期 Fall, 1st Year
		卒業要件 Required or Elective to Graduate	選択 Elective
到達目標 Goals	<p>1. 環境によって変化する生態系の基本的知識を身に付ける。 2. 環境問題の一つとして地球温暖化問題について理解を深める。 3. 環境問題や環境変化が人体に与える影響を考える。</p> <p>1. Acquire basic knowledge of ecosystems that change depending on the environment. 2. Deepen understanding of global warming as one of the environmental problems. 3. Consider the effects of environmental problems and changes on the human body.</p>		

<p>授業の概要 Course Overview</p>	<p>国際文化の多様性を理解する上では、どうしても環境問題や生命科学の進歩状況を理解しておく必要もある。本特論では、グローバルな環境と生態系の視点からの講義、国際的な食糧問題や栄養科学の視点からの講義、あるいは新型コロナ感染みたいな医学的知識や生命科学的知識が必要と思われる視点からの講義を受けて、環境と生命について学ぶ。</p> <p>In order to understand the diversity of international cultures, it is also necessary to understand the state of progress in environmental issues and life sciences. In this course, students will learn about the environment and life through lectures on the global environment and ecosystems, on international food issues and nutritional science, and on perspectives that require medical and life science knowledge, such as the novel COVID-19 infection.</p>
<p>ディプロマ・ポリシーとの関係 Diploma Policy Objectives</p>	<p>DP1-2 国際コミュニケーションの観点から専門的な研究を行うために必要な学術的思考力を身に付け、国際社会の課題や諸問題を理解し、論理的かつ批判的に分析する能力や問題・課題の解決に向けて提言・実行する能力を有する。 Acquire the academic cogitative skills necessary to conduct specialized research from the perspective of international communication, understand and logically as well as critically analyze issues and topics of the international community, and has the ability to make proposals and take action to solve these issues.</p> <p>DP2-2 現代のグローバル社会のさまざまな課題に対し学際的研究ができる能力を有する。 Acquire the ability to conduct interdisciplinary research on a range of issues that exist in the modern global society.</p>
<p>履修条件・注意事項 Prerequisites / Remarks</p>	
<p>授業計画 Course Schedule</p>	<p>(田川 一希 Kazuki Tagawa)</p> <p>1. 突然変異と自然淘汰のメカニズム The mechanisms of mutation and natural selection</p> <p>2. 性淘汰のメカニズムと動物の繁殖生態学 The mechanism of sexual selection and reproductive ecology of animals</p> <p>3. 植物の繁殖生態学 —送粉から種子散布まで— Reproductive ecology of plants from pollination to seed dispersal</p> <p>4. 血縁淘汰のメカニズムと利他行動 The mechanism of kin selection and altruistic behavior</p> <p>(福田 亘博 Nobuhiro Fukuda)</p> <p>5. 主要国における地球温暖化の要因、歴史・背景等 Factors, history, background, etc. of global warming in major countries</p> <p>6. 主要国で地球温暖化を抑制するために考えられている政策・対策等 Policies and measures considered to control global warming in major countries</p> <p>7. 地球温暖化が世界及び我が国の主要作物の生産に及ぼす影響 Impact of global warming on the production of major crops in the world and Japan</p> <p>8. SDGs (持続可能な開発目標) とは、また SDGs 2 「飢餓をゼロにするための食料安全保障、栄養改善及び持続可能な農業生産を推進する」ための具体的で実行可能な対策等 What are SDGs (Sustainable Development Goals)? SDGs 2 "Promote food security, nutrition improvement and sustainable agricultural production to eliminate hunger", concrete and feasible measures, etc.</p>

	<p>(村上 昇 Noboru Murakami)</p> <p>9. 先進国と発展途上国の環境の相違による人体の生理機能の違い Differences in the physiological functions of the human body due to environmental differences between developed and developing countries</p> <p>10. 世界的に使用されている農薬系薬物の生態系や人の健康への影響 Ecological and human health impacts of pesticide-based drugs used worldwide</p> <p>11. コンクリート社会がもたらす腸内細菌叢の変化と人体への影響 Changes in the gut microbiota brought about by the concrete society and their effects on the human body</p> <p>12. 脳の発達に影響する社会的・環境的要因 Social and environmental factors that influence brain development</p> <p>13. 世界的に蔓延するウイルス感染症について、ウイルス感染機序や免疫防御機序の基礎について The basics of viral infection and immune defense mechanisms in the context of the global spread of viral infections</p> <p>14. セクシャルマイノリティーについて、「体と脳の性差」の科学 The science of 'sex discrepancies in the body and brain' on sexual minorities</p> <p>15. グローバリゼーションによる東西飛行での「時差ボケ急増」のメカニズムと対策 Mechanism and countermeasure of "jet lag surge" in East-West flight due to globalization</p>
<p>学生に対する評価 Assessment Criteria</p>	<p>1～4回、5～8回、9～15回のそれぞれの講義担当者がレポートの課題を与え、それらのレポートの点数を集計して、最終評価点を出す。なお、レポートはコメントを付して返却する。</p> <p>The lecturers will assign reports for the first four, fifth through eighth, and ninth through fifteenth lectures, and the scores of these reports will be totaled to obtain the final evaluation score. The reports will be returned with comments.</p>
<p>時間外の学習について Preparation and Revision outside Class</p>	<p>毎回、次回の予告を行い、課題を提示するので予め調べておくこと。また、講義の後は、自分の言葉で説明できるように努めること。さらに詳しく勉強し、オフィスアワー等を利用して、不明な個所を質問し、わからないままにしないこと。</p> <p>In every lesson, preview of the next lesson will be given and tasks will be presented to enable preparation. Also, after the lecture, try to be able to explain in your own words. Study in more detail and use office hours to ask questions and do not leave them unclear.</p>
<p>テキスト Textbooks</p>	<p>資料を配布する Materials will be distributed.</p>
<p>参考書・参考資料等 References</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・鷲谷いづみ・矢原徹一「保全生態学入門—遺伝子から景観まで」文一総合出版 ・長谷川真理子・長谷川寿一「進化と人間行動」東京大学出版会

授業科目名 Course Name	社会心理学特論 Advanced Studies in Social Psychology	教員名 Course Instructor(s)	小林 太 笠井 綾 渡邊 耕二
		Eメールアドレス E-mail	小林 fkobayas@miyazaki-mic.ac.jp 笠井 akasai@sky.miyazaki-mic.ac.jp 渡邊 kwatanabe@edu.miyazaki-mic.ac.jp
授業形態 Class Format	講義 Lectures	オフィスアワー Office Hours	(小林) 火曜日、木曜日 (笠井) 月曜日、水曜日 (渡邊) 月曜日
科目番号 Course Code		担当形態 Mode of Instruction (Solo / Omnibus / Jointly)	オムニバス Omnibus
単位数 No. of Credits	2	配当年次 Allocated Year	1年後期 Fall, 1st Year
		卒業要件 Required or Elective to Graduate	選択 Elective
到達目標 Goals	<p>(1) 心理学がどのような学問なのかを理解している。 (2) 社会的心理学を理解している。 (3) 異文化を理解する上での社会心理学の重要性が理解できている。</p> <p>(1) I understand what kind of study psychology is (2) Understanding social psychology (3) Understand the importance of social psychology in understanding different cultures</p>		
授業の概要 Course Overview	<p>現代のグローバル社会における様々な課題に向き合っていくためには、個人の行動が他の人間や自分の所属する文化に影響を受けて作られていることを認知した上で、自分と他文化の他者を理解し、円滑なコミュニケーションを取ることが要求される。本科目の重点的目標は社会心理学的知識を得て受講者の対人関係力の向上を目指すことである。社会的感情、社会的認知、社会的行動、社会的影響、集団行動、コミュニケーション、紛争解決、社会心理学研究法等の学修が予定されている。</p> <p>In order to face various challenges in the modern global society, it is required to recognize that individual behavior is influenced by other people and the culture to which we belong. Having understood which, we are required understand people from cultures that are not your own and to make good communication. The primary goal of this course is to acquire socio-psychological knowledge and aim to improve the interpersonal relationship of the students. Students will be studying social emotions, social cognition, social behavior, social impact, group behavior, communication, conflict resolution, and social psychology research methods.</p>		

<p>ディプロマ・ポリシーとの関係 Diploma Policy Objectives</p>	<p>DP1-3 グローカルな交渉現場に必要な、客観的思考力や高度な推理・判断力を常に向上させる意欲・関心・態度を有する。 Acquire the motivation, interest and attitude to constantly improve objective thinking skills and advanced reasoning and decision-making skills required in glocal negotiation settings.</p> <p>DP2-1 異文化の多様性を客観的に見つめ、それぞれの特徴を的確に判断できる能力や異文化に関する知識を有する。 Acquire the ability to observe objectively at the diversity of foreign cultures and to accurately grasp the characteristics of each and has knowledge about foreign cultures.</p>
<p>履修条件・注意事項 Prerequisites / Remarks</p>	
<p>授業計画 Course Schedule</p>	<p>(小林 太)</p> <p>1. 社会心理学入門：社会心理学のABCとは何か Introduction to Social Psychology: What is ABC in Social Psychology?</p> <p>2. 社会的学習と社会的認知 Social learning and social cognition</p> <p>3. 社会的感情 Social feelings</p> <p>4. 自己意識 Self-consciousness</p> <p>5. 態度と説得 Attitude and persuasion</p> <p>6. 他者理解 Understanding others</p> <p>7. 社会的影響と服従 Social impact and obedience</p> <p>8. 好意と愛情 Favor and affection</p> <p>9. 援助行動 Helping behavior</p> <p>10. 集団と意志決定 Group and decision making</p> <p>(笠井 綾)</p> <p>11. 暴力と攻撃性 Violence and aggression</p> <p>12. ステレオタイプ、偏見、差別 Stereotype, prejudice, discrimination</p> <p>13. 社会における競争と協調</p>

	<p>Competition and cooperation in society</p> <p>(渡邊 耕二)</p> <p>1 4. 社会的行動を測定する方法</p> <p>How to measure social behavior</p> <p>1 5. エクセルによるデータの可視化 (相関分析と回帰分析を含む)</p> <p>Data visualization with Excel (including correlation analysis and regression analysis)</p>
<p>学生に対する 評価 Assessment Criteria</p>	<p>レポート50%、質疑応答での理解度 (口頭試問) 50%として総合評価する。なお、レポートはコメントを付して返却する。</p> <p>The overall evaluation will consist of 50% for the report and 50% for the comprehension in the Q&A session (oral examination). The report will be returned with comments.</p>
<p>時間外の学習 について Preparation and Revision outside Class</p>	<p>事前・事後学習として週4時間以上行うこと。授業内で提示される授業外学習に取り組むこと。</p> <p>Do at least 4 hours a week of pre- and post-study for a class. Work on out-of-class task presented in class.</p>
<p>テキスト Textbooks</p>	<p>授業内で資料を配布する。</p> <p>Materials will be distributed in class.</p>
<p>参 考 書・参 考資料等 References</p>	<p>考えることを重視しています。</p> <p>We want you to value "thinking" in this class.</p>

授業科目名 Course Name	日本教育史特論 Advanced Studies in the Educational History of Japan	教員名 Course Instructor(s)	河原 国男
		Eメールアドレス E-mail	kkawahara@edu.miyazaki-mic.ac.jp
授業形態 Class Format	講義 Lectures	オフィスアワー Office Hours	講義後に対応 After Class
科目番号 Course Code		担当形態 Mode of Instruction (Solo / Omnibus / Jointly)	単独 Solo
単位数 No. of Credits	2	配当年次 Allocated Year	2年前期 Spring, 2nd Year
		卒業要件 Required or Elective to Graduate	選択 Elective
到達目標 Goals	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本の教育の変遷を説明できる 2. 日本の教育に及ぼした西洋文化の影響を理解できる 3. 福沢諭吉の日本教育への貢献を説明できる 4. 国際環境下での日本の教育の課題を考えられる 		
授業の概要 Course Overview	<p>日本の知的道徳的教育水準は高度に達成されている。それは短時日に模倣剽窃によって達成されたのではない。R. ドーア『江戸時代の教育』（Education in Tokugawa Japan）が明らかにしているように、「向上」の精神的基盤とともに、先人たちの持続的努力によって蓄積された。その場合、自生的であるとともに、諸外国との文化接触を通じて、学校の内外で種々の教育が展開していった。本授業では、講義を通じて、1) わが国の教育の達成とともに、18世紀以降の国際的環境の中で、とりわけ2) 古典中国との関連、3) 近代欧米文明との関連を通じて、わが国において、どのような教育理念、制度、実践が形成されたのかを取り上げ、わが国教育の史的基盤を明らかにし4) 国際関係の中でのこれからのわが国の教育課題を考察にすることを目的とする。</p>		
ディプロマ・ポリシーとの関係 Diploma Policy Objectives	<p>DP1-2 国際コミュニケーションの観点から専門的な研究を行うために必要な学術的思考力を身に付け、国際社会の課題や諸問題を理解し、論理的かつ批判的に分析する能力や問題・課題の解決に向けて提言・実行する能力を有する。</p> <p>Acquire the academic cogitative skills necessary to conduct specialized research from the perspective of international communication, understand and logically as well as critically analyze issues and topics of the international community, and has the ability to make proposals and take action to solve these issues.</p> <p>DP2-1 異文化の多様性を客観的に見つめ、それぞれの特徴を的確に判断できる能力や異文化に関する知識を有する。</p> <p>Acquire the ability to observe objectively at the diversity of foreign cultures and to accurately grasp the characteristics of each, and has knowledge about foreign cultures.</p> <p>DP2-2 現代のグローバル社会のさまざまな課題に対し学際的研究ができる能力を有する。</p>		

	<p>Acquire the ability to conduct interdisciplinary research on a range of issues that exist in the modern global society.</p>
<p>履修条件・ 注意事項 Prerequisites / Remarks</p>	
<p>授業計画 Course Schedule</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 現代日本人の知的道徳的な達成と、それを可能にする学校教育の最前線の実践について、国立大学附属学校での先行事例とともに、教師の継続的な「研究授業」Lesson Studyの蓄積等の例を取り上げて、その基本事実を確認する。 2. 19世紀半ばでの「開国」以前と、以後におけるわが国の文化・教育状況にかかわる基本的事実について概観する。 3. 現代日本教育水準の高度な達成については、「学び」にかかわる長期にわたる史的基盤があることについて、R.ドーア『江戸時代の教育』（Education in Tokugawa Japan）等の先行する知見を原文及び邦訳によって紹介する。とくに庶民層に定着している「学び」による知的道徳的な“向上”の精神について取り上げる。 4. 「学び」の史的基盤を形成するものとして、古典中国との接触と教育の構想について、18世紀初頭の伊藤仁斎『童子問』の「学び」の理念を中心に明らかにする。 5. 「学び」の史的基盤を形成するものとして、古典中国との接触と教育の構想について、仁斎を批判的に継承している18世紀初頭の荻生徂徠『学則』等を中心に明らかにする。 6. 徂徠以降の18世紀後半以降における藩校を中心とした学校制度下での組織的な「学び」の普及状況について明らかにする。 7. 幕末明治以降における西欧文明との文化接触について、万延元年（1860）玉虫左大夫『航米日録』、慶応年間の『西洋事情』等を中心に、異文化接触における「学び」の様相と、障害児教育制度を含む体系的な学校制度の認識状況を明らかにする。 8. 欧米近代との接触と教育の構想について、基本事実の確認とともに福沢諭吉『文明論之概略』を中心に知的道徳的に自立する諸個人から構成される“国民国家”の確立を目指すものであったことを明らかにする。 9. 欧米近代との接触と教育の構想について、基本事実の確認とともに福沢諭吉『学問のすすめ』（1872-1876,明治5-9）を中心に「学び」の理論的な指針を明らかにする。 10. 近代日本の教育の達成について、ペスタロッチの理念とともに欧米の Reformatory School 等を導入して創設（1914,大正3）した留岡幸助の「北海道家庭学校」を取り上げ明らかにする。 11. 近代日本の教育の課題について、福沢の教育構想を中心的観点として明らかにするとともに、同時代人の自己反省として夏目漱石の講演「現代日本の開化」（1911,明治44）を中心に考察する。 12. 戦後日本の「民主主義」を理念とし「教育の機会均等」を原則とする教育制度改革について、「米国使節団報告書」との関連を中心に明らかにする。 13. 丸山真男の福沢諭吉論、大塚久雄の M.ヴェーバー論を取り上げて、民主主義を理念と

	<p>する社会構想と人間類型に関わる教育認識について明らかにする。</p> <p>14. 21世紀の「協調的」であるとともに「競争的」な国際環境の中でのわが国の教育の課題について、直近の中教審答申等を資料に検討する。</p> <p>15. 国際環境の中での日本教育の成果と課題について、これまでの歴史認識から、民主主義を理念とする主権的“国民国家”の確立を目指す「学び」の観点から総括する。</p>
<p>学生に対する 評価 Assessment Criteria</p>	<p>4つの課題についてレポートを提出させ、1課題25点として採点し、100点満点とする。 なお、レポートはコメントを付して返却する。</p>
<p>時間外の学習 について Preparation and Revision outside Class</p>	<p>福沢諭吉や夏目漱石などに関する読書を希望する。</p>
<p>テキスト Textbooks</p>	
<p>参 考 書 ・ 参考資料等 References</p>	